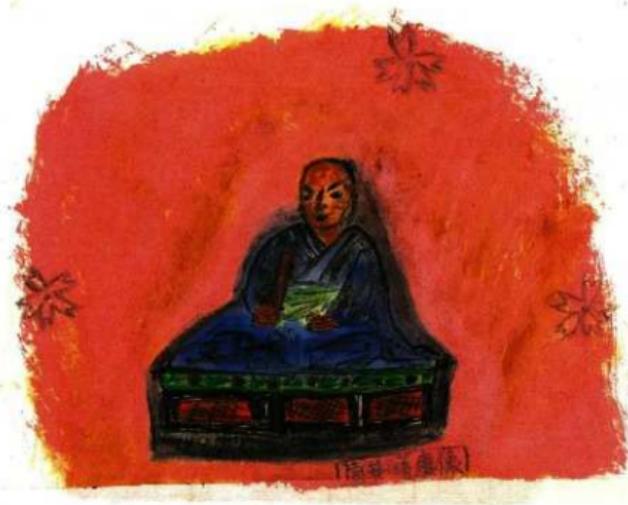


筒井城

第5次発掘調査報告書

付1 筒井城 第6次発掘調査報告

付2 筒井順慶五輪塔覆堂石造物・屋瓦調査報告



2004

大和郡山市教育委員会

筒井城第5次発掘調査報告書

例　　言

1 本書は、大和郡山市筒井町字シロで実施した発掘調査の報告書である。

2 調査は、筒井城の範囲確認調査として実施した。

3 調査期間、調査面積は下記の通りである。

調査期間 2003年2月27日～3月31日

調査面積 第1トレンチ165m²、第2トレンチ50m²×4面、第3トレンチ22m²

合計237m²（のべ384m²）

4 調査は以下の組織で実施した。

現地調査

調査員：山川均（大和郡市教育委員会　社会教育課）

補助員：小澤晃子（当時奈良大学大学院）、岡本智子（奈良大学大学院）、下高大輔（奈良大学）

作業員：（有）ワーカー

事務

大和郡市教育委員会　社会教育課

5 本書は、以下の分担で作成した。

製図・拓本・トレース：岡本、下高

写真撮影：山川

執筆：岡本（V章）、山川（その他）

レイアウト：岡本

編集：山川

6 調査および報告書作成に際し、以下の組織より貴重なご教示・ご指導をいただいた（五十音順・敬称略）。

元興寺文化財研究所、城郭談話会、瀬戸市埋蔵文化財センター、筒井城総合調査会議、天理参考館、奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所、文化庁。

7 調査に関わる写真・スライド・実測図および出土遺物は全て大和郡市教育委員会で保管している。広く活用されたい。

8 現地調査に際しては、地元筒井町および筒井順慶顕彰会の方々にはたいへんお世話になりました。記して感謝いたします。

凡　　例

1 遺構実測図に示した標高は、東京湾平均海面（T.P）からのプラス値である。

2 遺構実測図中の座標は、世界測地系に基づくものである。また、図中矢印で記した方位は座標北を表す。

3 遺物番号は全てが通し番号になっており、実測図・観察表・図版それぞれの対照が可能である。

4 遺物実測図の縮尺は1/3を基本とする。

5 遺物実測図の断面は、陶磁器・須恵器がベタ塗り、瓦器・瓦質土器、瓦が網かけ、土師器は白抜きをしている。

6 土色および遺物の色調に関しては、「新版標準土色帳」に依拠した。

本文目次

I	周辺の環境	1
(1)	地理的環境	1
(2)	歴史的環境	3
II	筒井城跡における既往の調査	8
(1)	第1次調査	8
(2)	第2次調査	8
(3)	第3次調査	9
(4)	第4次調査	9
III	調査の契機および経過	12
IV	調査の概要	12
(1)	調査区の設定	12
(2)	第1トレンチ	17
(3)	第2トレンチ	17
(4)	第3トレンチ	26
(5)	小結	28
V	遺物	28
(1)	第1トレンチSD-01出土遺物	28
(2)	第2トレンチ出土遺物	31
VI	まとめ	37

図目次

図1	筒井城周辺地形図1	1
図2	筒井城周辺地形図2	2
図3	筒井城周辺地域の主要遺跡分布図（古代，S：1/50,000）	4
図4	筒井城周辺地域の主要遺跡分布図（中世，S：1/25,000）	6
図5	筒井城の周辺遺跡	7
図6	既往の調査地位置図（S：1/5,000）	9
図7	既往の調査	10
図8	調査地位置図（S：1/2,000）	12
図9	第1トレンチ SD-01平面図（S：1/50）	13
図10	第1トレンチ SD-01土層	15
図11	第1トレンチ SD-01土層図（S：1/50）	15
図12	第2トレンチ土層図（S：1/50）	18
図13	第2トレンチ第1構造面平面図（S：1/50）	19
図14	SP-101 遺物出土状況および土層断面図（S：1/10）	20
図15	SP-102 遺物出土状況および土層断面図（S：1/10）	21

図16 SP-103 遺物出土状況 (S : 1/10)	20
図17 第1層に混じる焼土塊	21
図18 第2トレンチ第2遺構面平面図 (S : 1/50)	22
図19 第2トレンチ第3遺構面平面図 (S : 1/50)	23
図20 第2トレンチ第4遺構面I期平面図 (S : 1/50)	24
図21 第2トレンチ第4遺構面II期平面図 (S : 1/50)	25
図22 第2トレンチ SB-401 柱列断面図 (S : 1/50)	26
図23 第2トレンチ第4遺構面III期平面図 (S : 1/50)	27
図24 第1トレンチ SD-011・2層出土遺物実測図 (S : 1/3)	29
図25 第1トレンチ SD-013層出土遺物実測図 (S : 1/3)	30
図26 内面のハケ調整痕および外面の接合痕 (No.41)	31
図27 第1トレンチ SD-01出土鉄砲玉実測図 (S : 1/1)	31
図28 第1トレンチ SD-01出土建築材実測図 (S : 1/6)	32
図29 第1トレンチ SD-01出土石造物実測図および拓影 (S : 1/6)	33
図30 第2トレンチ出土遺物実測図① (S : 1/3)	34
図31 第2トレンチ1層出土遺物実測図および拓影 (S : 1/4)	35
図32 第2トレンチ出土遺物実測図② (S : 1/3)	35
図33 第2トレンチ SD-401出土遺物実測図 (S : 1/3)	36

表 目 次

表1 筒井城周辺遺跡一覧 (古代)	4
表2 筒井城周辺遺跡一覧 (中世)	7
表3 筒井氏・筒井城関連年表	11
表4～6 遺物観察表1～3	38

図 版 目 次

図版1 1：調査前風景 (北より) 2：第1トレンチ調査前風景 (北より)	
図版2 1：第1トレンチSD-01完掘状況 (南より) 2：第1トレンチSD-01完掘状況 (西より)	
図版3 1：第1トレンチSD-01東側斜面 (北より) 2：第1トレンチSD-01遺物出土状況 (北より)	
図版4 1：第2トレンチSP-102遺物出土状況 (東より) 2：第2トレンチ第1遺構面完掘状況 (南より)	
図版5 1：第2トレンチSX-201遺物出土状況 (東より) 2：第2トレンチ第2遺構面完掘状況 (北より)	
図版6 1：第2トレンチ第3遺構面ピット検出状況 (北より) 2：第2トレンチ第3遺構面完掘状況 (北より)	
図版7 1：第2トレンチSD-401遺物出土状況 (西より)	

2：第2トレンチ第4邊縁面完掘状況（北より）

図版8 1：第3トレンチ完掘状況（西より）

2・3：現地説明会風景

図版9～15 遺物

I 周辺の環境

(1) 地理的環境 (図1・2)

富雄川は現在、矢田丘陵と西京丘陵の狭間を通じ、矢田丘陵縁辺の低位段丘裾を北東から南西方向に流下し、安堵町笠目付近で大和川に合流している。しかし、本来は現在の川筋の東に拡がる緩傾斜の扇状地を北西から南東方向に流れ、佐保川に合流していたものと思われる。その名残りは富雄川三ヶ井（城～新木）、同十ヶ井（城～田中～小南～豊浦【分流】～筒井・杉）、同七ヶ井（満願寺～池之内【分流】～小林・筒井）に認めることができる（秋永1966）。中世に起源し、近世から現代に至るまでこの地域における灌漑の根幹をなすこれらの用水系の内、十ヶ井の佐保川との合流地点に近い杉町では、発掘調査によって中世の川跡が検出されているが（寺澤ほか1980）、これなどは中世の基幹灌漑水路の一部であった可能性が強い。すなわち筒井は、灌漑系としては富雄川水系に属したのである（図1）。

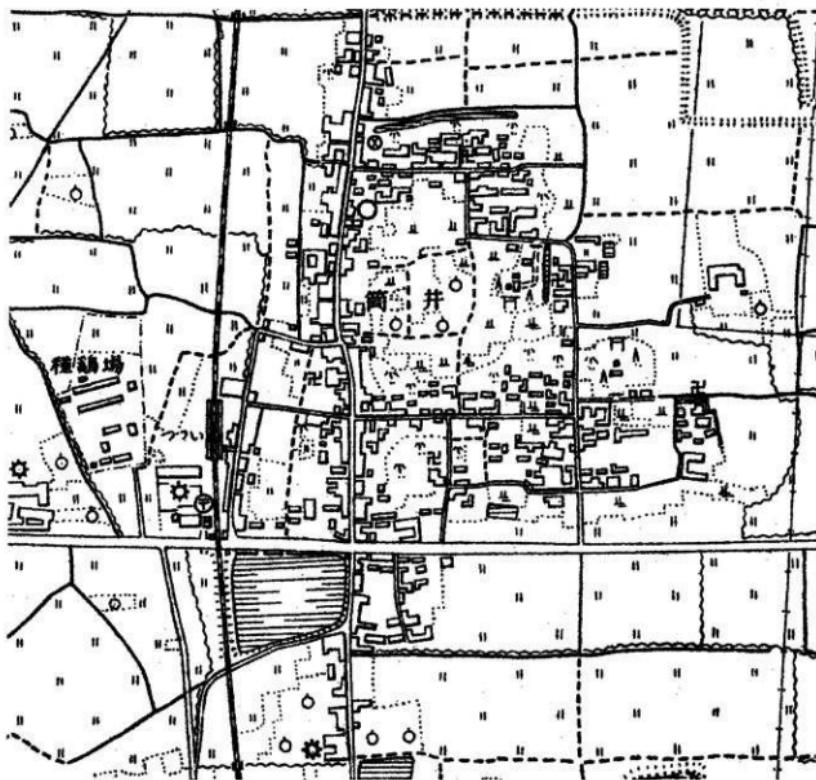


図1 筒井城周辺地形図1 (原図は昭和29年測量「大和郡山市全図」S:1/20,000)

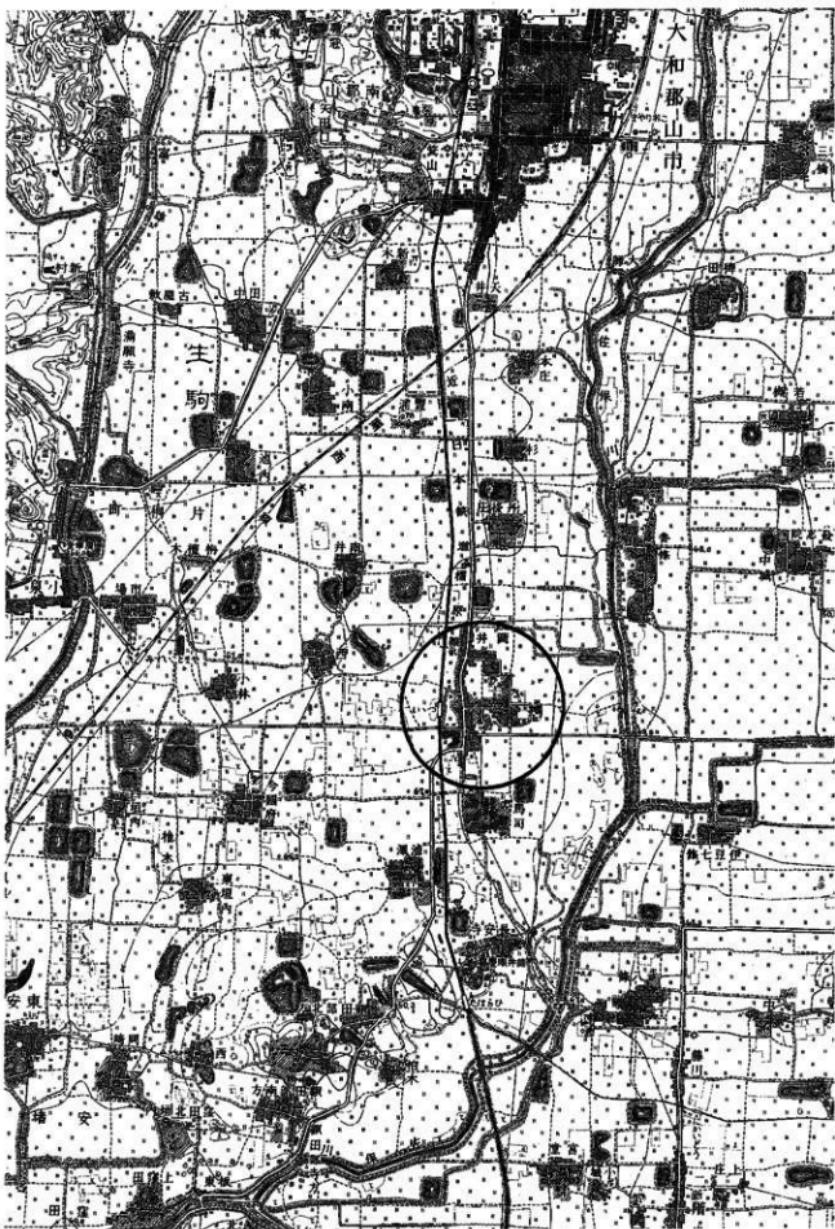


図2 简井城周辺地形図2(原図は大正11年測量 地形図「郡山」S:1/25,000)

次に、筒井城周辺の地形について概観する。西京丘陵は郡山新木山古墳（図3-3）付近でいったん途絶えるが、ちょうど筒井の辺りで再び緩やかに起伏し、より南の額田部丘陵へと続く。すなわち筒井城は額田部丘陵の北端付近に立地するが、そこに先述の富雄川旧流路が形成したとみられる小規模な谷地形が複雑に入り込む。主郭付近において発掘で検出される「地山」は上部大阪層群からなる黄褐色の粘土～シルト層であり、地形的には安定するものの、城の南西側を旧河道が通り、城跡南東で佐保川に合流していたとみられることから、筒井城は古代～中世にあっては独立丘陵的な景観（平野部に島状に見られる低位の小丘陵）を呈していたものと思われる（図2）。

（2）歴史的環境

本項においては、今回の調査において検出された遺構群と関連する遺跡について、地理的にひとつまとまりをなす（前項参照）富雄川下流域を中心に概観する。

古墳時代（図3、表1）

今回の調査（第5次調査）において4世紀の溝状遺構が検出されているが、同じ富雄川水系に属する古墳時代前期の遺跡としては、筒井城の3km東に位置する原田遺跡（24、山川1992a）がある。ここでは弥生時代中期後葉～古墳時代前期前葉にかけて環濠で囲まれた集落が2ヶ所存在した。このほか、原田遺跡より富雄川をさらに下った酒ノ免遺跡（34、藤井1986）でも古墳時代前期にさかのばる遺物の出土が報告されている。また、富雄川のより上流にあたる田中垣内遺跡（2、山川2003）においては、古墳時代前期前葉の環濠や竪穴住居20棟などが検出されている（図5-1）。

このほか、丘陵部に位置する当該期の遺跡として、菩提山遺跡（25、服部1988）では弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居が4棟検出されている。また、その北側の段丘状に位置する小泉遺跡（11、今尾1990）でも弥生時代後期後半の竪穴住居が4棟検出されている。

なお、この富雄川下流域における首長墓クラスの古墳には、前期のものとしては小泉大塚古墳（10、入倉1997）があげられる。本古墳は全長55mの竪穴式石室を主体部とし、画文帯神獣鏡や内行花文鏡など7面の銅鏡が出土している。時期は布留1式期である。筒井城周辺の古墳時代前期の主な遺跡については以上の通りであり、今回筒井城主郭下層で検出された溝状遺構（第IV章第3項参照）もこうした遺跡群との関わりの中で今後評価してゆく必要があるだろう。

古代（図3、表1）

現在のJR大和小泉駅東側の区画整理事業において、7世紀前葉の掘立柱建物を主体とした遺跡群が確認されている。来光遺跡（14、山川1992b、図5-2）においては、ほぼ正方位の3×5間の掘立柱建物や、それに南接する2×2間の総柱建物が検出されている。これらの建物の時期は、7世紀第1四半期である。また、本遺跡からは格子目タタキを持つ平瓦も出土しており、この周辺に創建時期が7世紀前葉にさかのばる初期寺院が存在する可能性を示している。また、来光遺跡に近い神ノ木遺跡（15、山川1994）では、やはり7世紀前葉の铸造関連遺構が検出されている（図5-3）。このほか、高月遺跡（13、山川1991）では掘立柱建物が計10棟検出されており、正方位に近い振れをもつものと、20°程度北で西に振れるものに大別される。

上記した7世紀前葉の遺跡群については、遺跡群の南側を東西に走る龍田道（北の横大路）との密接な関連が指摘されている（山川1996a）。その意味では、今回筒井城の主郭下層で検出された7世紀初頭の正方位の掘立柱建物（第IV章第3項参照）も同じ龍田道に沿う遺跡であり、同様

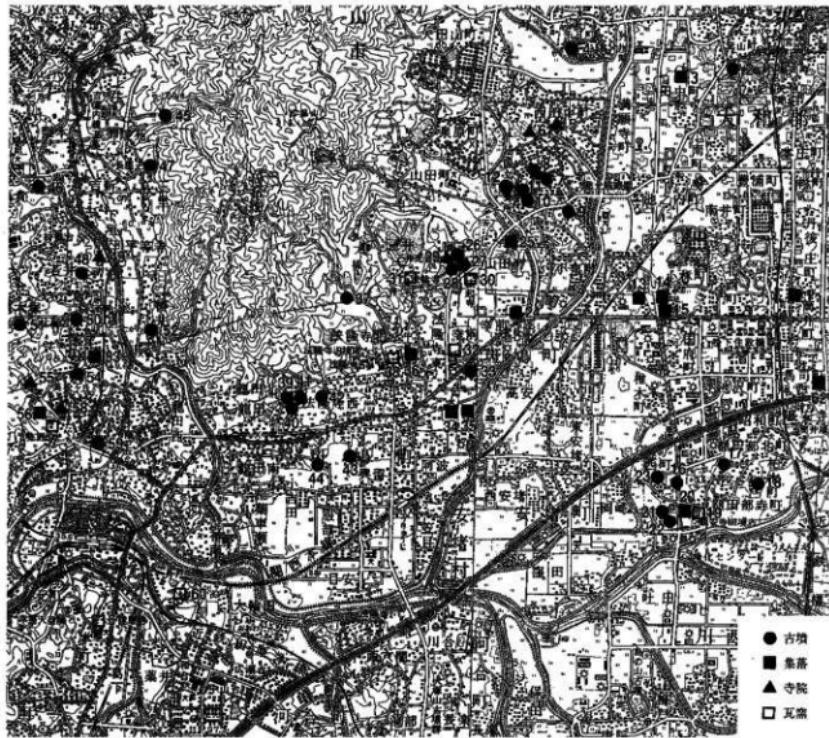


図3 简井城周辺地域の主要遺跡分布図（古代。S:1/50,000）

No	遺跡名	No	遺跡名	No	遺跡名
1	簡井城（調査地）	22	古墳	43	斑鳩大塚古墳
2	田中垣内遺跡	23	古墳	44	戸垣山古墳
3	郡山新木山古墳	24	原田遺跡	45	大谷古墳
4	割堀古墳	25	吉根山遺跡	46	ツボリ山古墳
5	西田中瓦窯	26	瓦塚1号墳	47	三里古墳
6	内山瓦窯	27	瓦塚2号墳	48	西宮古墳
7	小泉東狐塚古墳	28	瓦塚3号墳	49	安養寺瓦窯
8	小泉孤塚古墳	29	三井瓦窯	50	鳥土塚古墳
9	六道山古墳	30	法起寺（岡本宮）	51	柿原古墳
10	小泉大塚古墳	31	法輪寺	52	柿井官山古墳
11	小泉遺跡	32	中宮寺跡	53	柿井西宮遺跡
12	笛塚古墳	33	駒塚古墳	54	大塚山古墳
13	高月遺跡	34	酒ノ免遺跡	55	今池瓦窯
14	来光遺跡	35	上宮遺跡（抱波琴垣宮）	56	上ノ御所瓦窯
15	神ノ水遺跡	36	東院下層遺跡（斑鳩宮）	57	平隆寺
16	額田郡狐塚古墳	37	仏塚古墳	58	勢野茶臼山古墳
17	舟墓古墳	38	法隆寺	59	峯ノ阪遺跡
18	松山古墳	39	越田御坊山1号墳	60	西安寺跡
19	額田寺	40	越田御坊山2号墳	61	片岡王寺跡
20	額田寺周辺遺跡	41	越田御坊山3号墳	62	馬司遺跡
21	古墳	42	藤ノ木古墳		

表1 簡井城周辺遺跡一覧（古代）

の評価が与えられるものと思われる。筒井城周辺は古代（7世紀前葉）においても交通の要衝と認識され、そこに何らかの公的施設が存在したものと考えてよからう。

なお、上記した諸例に比較するとやや時期が下り、また龍田道からも距離が離れるが、馬司遺跡（62、山川・岡本2001）では7世紀第4四半期のほぼ正方位の掘立柱建物2棟が検出されている。また、ここでは重圓文軒丸瓦も出土しており、やはり何らかの公的施設の存在が想定される。

中世（図4、表2）

筒井城の南方、約1kmに位置する馬司遺跡（2、山川・岡本2001）は、筒井城と「吉野街道」と呼ばれる古道を介して結ばれており、両者の間には密接な関係が指摘し得る。ここでは14世紀から17世紀初頭にいたる遺構群が確認されているが、中でも居館の周囲を囲繞したと考えられる大溝からは大量の遺物が出土しており、該期の遺物組成の標準的な資料となっている（図5-4）。また、ここからさらに南方に位置する額安寺（21、山川・岡本2003）は鎌倉時代においては馬司荘の領家職を有していたが^{注1)}、ここでは近年の調査によって13世紀前葉にさかのぼる大規模な整地痕跡が検出されている。

筒井城の南方に位置する菅田遺跡（25、小栗ほか2000）は、筒井氏が盟主であった武士団、戊亥脇党に属していた菅田氏の居館に関わる施設と考えられる掘などの遺構が検出されている（図5-5）。ちなみに筒井城中核付近には現在、「菅田比売神社」が鎮座しており、菅田氏はそれとの関連が考えられる一族である。

筒井城の北方約3kmに位置する郡山城（31）は、天正8年（1580）のいわゆる「大和一国破城」に伴い、筒井氏が筒井城から本拠を移動した城郭であり、瓦葺の建築物や高石垣を備えた織豊系城郭であった。ここでは発掘調査により筒井氏段階にさかのぼるとみられる遺構は検出されていないが、筒井期のものと思われる軒瓦が出土している（山川1996b）^{注2)}。

このほか、筒井城から北西に約2kmに位置する若槻環濠（10、山川2000a）では現存する環濠が発掘調査され、環濠の掘削が13世紀中葉にさかのぼるものであることや、それが意外に小規模であり、防御用途というよりは灌漑用途を主眼においたものであったことが判明した（図5-6）。また、若槻環濠の北西に位置する美濃庄遺跡今倉地区（12、山川・伊藤1997）では11世紀末～13世紀前葉に至る遺構が検出されているが、溝などによる区画はみられず、若槻環濠のように集村化する以前の集落としての評価がなされている。

なお、13世紀を画期として急速に進行する集村化と密接な関係を有する事象として条里形耕地の開発があげられる（山川1998）。この条里形耕地の開発過程を具体的に知ることができる事例として、中付田遺跡（29、山川2000b）の発掘調査がある。

【注】

注1) 「額安寺円位別当職等譜」額安寺古文書後～1「大和郡市史史料集」。

注2) この点は本書付2で、頸巣五輪塔覆室の所用瓦の紹介に際して詳説している。

【参考文献】

秋水政孝 1966「莊園と武士」「大和郡市史」

今尾文昭 1990「小泉遺跡発掘調査報告書」「奈良県遺跡調査概報1989年度」奈良県立橿原考古学研究所

入倉徹裕 1997「小泉大塚古墳」「島の山古墳調査概報小泉大塚古墳調査報告」奈良県立橿原考古学研究所

小栗明彦ほか 2000「菅田遺跡」奈良県立橿原考古学研究所

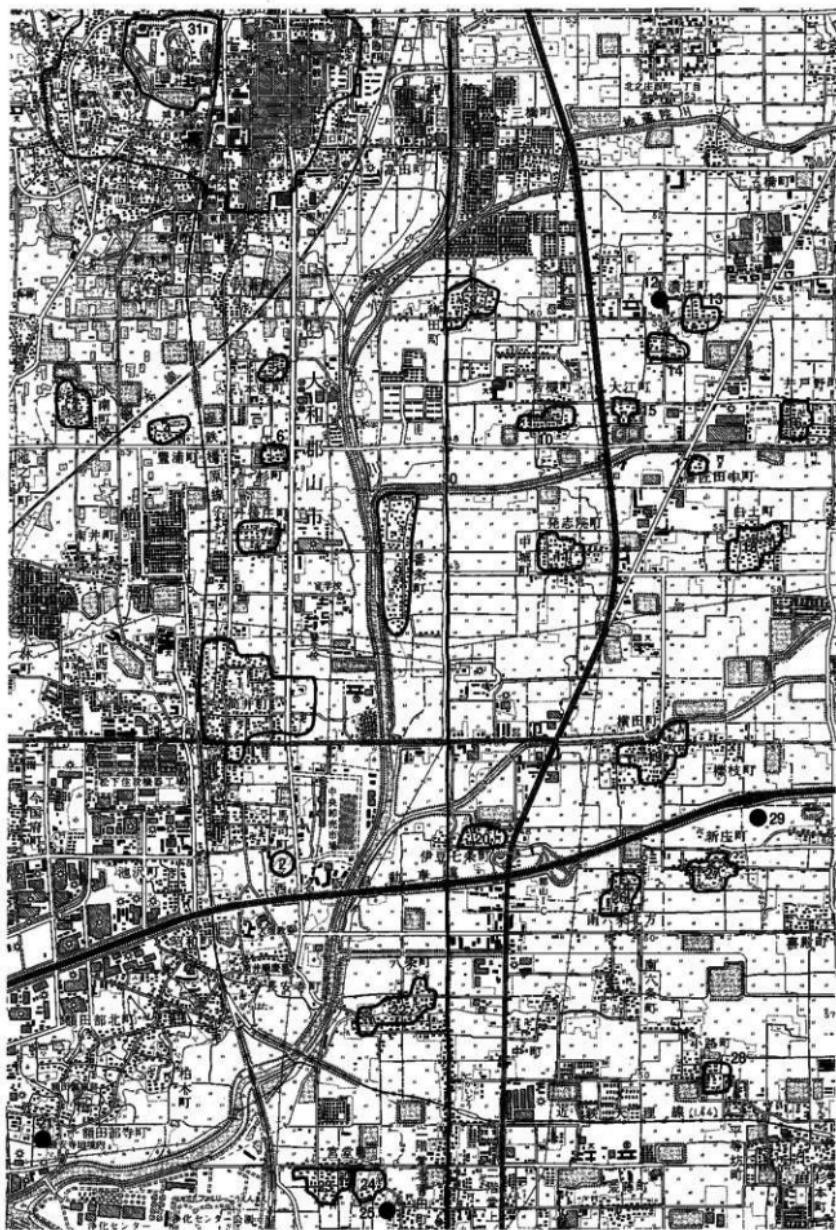


図4 筒井城周辺地域の主要遺跡分布図（中世、S : 1/25,000）

番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	筒井城(調査地)	17	香川田中環濠
2	馬司遺跡	18	白土環濠
3	小南環濠	19	横田環濠(横田城跡)
4	農道環濠	20	伊豆七条環濠
5	本庄環濠	21	御安寺
6	妙環濠	22	八条環濠
7	丹後庄環濠	23	宮堂環濠
8	仲田環濠	24	小城環濠
9	香条環濠(香条城跡)	25	菅田遺跡
10	若櫻環濠	26	本柳生環濠
11	免志院・中城環濠	27	新庄環濠
12	美濃庄遺跡	28	小路環濠
13	大美濃庄環濠	29	中付田遺跡
14	小美濃庄環濠	30	下ノ道
15	大江環濠	31	郡山城跡・城下町遺跡
16	井戸野環濠		

表2 筒井城周辺遺跡一覧(中世)



1 田中垣内遺跡第3次調査



2 米光遺跡



3 神ノ木遺跡鉄造造橋



4 馬司遺跡



5 菅田遺跡(小栗はか2000より)



6 若櫻環濠

図5 筒井城の周辺遺跡

- 寺澤薰はか 1980「本庄・杉町遺跡試掘調査報告」『奈良県立橿原考古学研究所』
- 服部伊久男 1988「菩提山遺跡」大和郡山市教育委員会
- 藤井利章 1986「酒ノ免遺跡の研究」庄地町教育委員会
- 山川 均 1991「高月遺跡発掘調査報告」大和郡山市教育委員会
- 1992 a 「原田遺跡第3次調査報告」大和郡山市教育委員会
- 1992 b 「来光遺跡第2次発掘調査概報」大和郡山市教育委員会
- 1994「神ノ木遺跡発掘調査概報」大和郡山市教育委員会
- 1996「大和における7世紀代の主要交通路に関する考古学的研究」『ヒストリア』150
- 1996b「城郭瓦の創製とその展開に関する覚書」『畿島城郭』3
- 1998「中世集落の論理」『考古学研究』45-2
- 2000 a 「若槻塚第1次発掘調査報告書」大和郡山市教育委員会
- 2000 b 「大和郡山市中付田遺跡の発掘調査」『条里制・古代都市研究』16
- 2003「田中垣内遺跡第2次～第4次調査」『平成14年奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』奈良県内
市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会
- 山川均・伊藤雅和 1997「美濃庄遺跡今倉地区発掘調査報告書」大和郡山市教育委員会
- 山川均・岡本智子 2001「馬司遺跡第1次発掘調査報告書」大和郡山市教育委員会
- 2003「振安寺第8次発掘調査報告書」大和郡山市教育委員会

II 筒井城跡における既往の調査

筒井城跡においては、1982年以来、過去4次にわたり発掘調査が実施されている（図6）。以下、各々の調査成果概要について述べる。

（1）第1次調査

昭和57年（1982）12月、民間の宅地造成計画に伴い実施された試掘調査。今回の調査地の東の、まさに城郭の中核部分（字「シロJ」）が調査されている。柱穴と思われるピットや直径3.5mにおよぶ井戸などが検出されているが（図7）、業者が開発を中断したため図8に示すように対象地に2つのトレンチを配したのみで、本調査は行われていない。^⑪

【文献】伊藤勇輔「筒井城発掘調査概報」『奈良県立橿原考古学研究所』1983。

（2）第2次調査

昭和63年（1988）2～3月、民間の倉庫建設に伴い実施された発掘調査。調査面積は260m²と比較的小規模であったが、その中で井戸が17基も検出されている。井戸の時期は13世紀中葉～14世紀中葉のものが大半を占めている。また浅い溝状の落ち込みからは大量の瓦器や土師皿が出土した。なお、この時期に本地區が「筒井城」の範囲に含まれるかどうかは不明である。^⑫

【文献】山川均「筒井城第2次 筒井城東門地区発掘調査概報」『大和郡山市遺跡調査概報11』大和郡山市教育委員会、1988。

(3) 第3次調査

平成2年（1990）2～3月、民間大型店舗建設に伴い実施された発掘調査。16世紀末に廃絶する井戸や屋敷跡2棟が検出された。これらは天正8年の筒井城廃城（表3参照）に伴い、郡山に移転した武士の屋敷跡と推定される。

【文献】山川均『筒井城第3次 森目地区発掘調査概報』大和郡市教育委員会、1991。

(4) 第4次調査

平成12年（2000）4～5月、第1次調査と同じ字「シロ」において再び住宅開発の話が再燃したため、遺構の拡がりや時期幅などを確認するために実施された調査である。この調査は性格上、最上面の遺構面で止めたが、一部の掘り下げなどによって13～16世紀の時期幅をもつ遺物の出土を確認した。また、遺構自体も調査区の全域に拡がっていることが確認され、本地区の重要性が改めて認識された。その成果を受け、大和郡市では本地区的買収を行ったのである。なおこの調査は、字「シロ」地区における本格的な調査のための基礎データを得ることを目的とした調査であったため、報告書等は刊行していない。



図6 既往の調査地位図 (S : 1/5,000)



第1次調査 第1トレンチ（奈良県道路調査概報 1982-2』より）



第2次調査 東西トレンチ



第3次調査 トレンチ全景



第4次調査 遺物出土状況

図7 既往の調査

【注】

注1) 後述の第4次調査の結果、参考文献に記されたトレンチ配置図に大幅な誤りがあることが明らかとなったので、第4次調査のデータおよび参考文献の記述に基づき、今回トレンチ位置を推定復元した（図8参照）。

注2) 調査概報では遺構個々の詳細なデータなどは一切公表されておらず、また調査も今回の調査（第2トレンチ）で明らかになったように（後述）明確な複数の遺構面を認識しないまま一気に地山まで掘り下げるというひじょうに粗いものである。したがってこの時「本調査」がなされなかったということは、皮肉なことに筒井城跡の保全という観点に立てば犠牲であったといわざるを得ない。

注3) 現在、地割などから推定される外堀は16世紀代に形成されたものである可能性が高いと考えられる。

西暦	和暦	筒井氏と筒井城に関する主な出来事
1386	至徳3	筒井順覚、興福寺衆中（官符衆徒）として文献に現れる。
1403	応永11	筒井氏、後南朝方の著尾為妙・十市道重に敗れ、筒井郷を焼き払われる。
1429	永享1	大和永草の乱が起こる。順覺は十市氏らと井戸氏を支持し、越智・著尾氏が支持する畠田中坊氏に対抗する。筒井城が文献に初めて現れる。
1434	永享6	越智氏を攻めて敗死する。筒井城・越智氏に攻められる。
1435	永享7	筒井順弘、筒井氏の惣領となる。
1440	永享12	大和永草の乱、室町幕府を味方につけた筒井方の勝利で終わる。
1441	嘉吉1	順弘、弟の成身院光宣に背かれて没落する。光宣の弟が順永と称し、筒井氏惣領となる。
1443	嘉吉3	順弘、越智氏の援助によって筒井城を奪い返すが、一族・家臣に背かれて殺害される。
1444	文安1	順永、越智勢に筒井城を攻められるが、これを撃退する。
1447	文安4	古市鳳仙、筒井を夜襲し市場を焼く。
1450	宝徳2	筒井市場、失火のため30軒ばかり焼失する。
1457	長禄1	筒井氏の所領、幕府により没収され、興福寺に寄進される。
1459	長禄3	細川勝元のはからいで、筒井氏の所領が回復する。
1467	応仁1	応仁の乱が起こる。筒井氏は畠山政長（東軍）の味方になる。
1476	文明8	順永が亡くなる。長男の順尊が筒井氏惣領を嗣ぐ。
1477	文明9	応仁の乱が終わる。順尊は畠山義就と結ぶ越智氏の台頭により、筒井城を自ら焼き、東山内（大和高原）へ没落する。
1482	文明14	順尊、筒井へ戻り、稗田・箕田を焼き払う。
1483	文明15	順尊、再び東山内へ没落する。越智氏家臣の堀氏が筒井城に入る。
1489	長享3	順尊が亡くなる。
1497	明応6	筒井氏・越智氏を破り、所領を回復する。
1499	明応8	順尊長男の順賢（順興）、筒井氏惣領を嗣ぐ。京都より赤沢朝経が大和に侵入する。
1505	永正2	筒井氏と越智氏が和睦し、大和国人衆が一揆を結ぶ。
1506	永正3	京都より赤沢朝経が再び大和に侵入し、筒井氏は東山内へ没落する。
1520	永正17	順尊次男の順興、筒井氏惣領を嗣ぐ。筒井氏と越智氏と和睦し、再び大和国人衆が一揆を結ぶ。
1528	享禄1	柳本貢治が大和に侵入する。
1531	享禄4	筒井氏の山城である椿尾上城（奈良市北椿尾町）が初めて文献に現れる。
1535	天文4	順興が亡くなる。藤松（順昭）が惣領を嗣ぐ。
1537	天文6	本沢長政が大和に侵入する。
1543	天文12	順昭、須川城（奈良市須川町）を攻め落とす。大和国人衆の一揆が崩壊する。
1547	天文16	順昭、著尾城（広陵町の場、萱野・弁財天）を破却する。大和をほぼ平定する。
1549	天文18	順昭、比叡山に入り、家督を藤勝（順慶）に譲る。
1550	天文19	順昭が亡くなる。
1559	永禄2	松永久秀、大和に侵入する。藤勝は筒井城を奪われ、椿尾上城へ逃げる。久秀、信貴山（平群町信貴畑）に城を構える。
1561	永禄4	松永久秀、多聞山城（奈良市多門町）を築く。
1566	永禄9	藤勝、松永勢から筒井城を奪い返す。藤勝、出家して陽舟房頼慶と名乗る。
1568	永禄11	織田信長、上洛する。久秀は信長の配下となる。筒井城、松永勢に奪われる。
1571	元亀2	筒井勢、反市の戦いで松永勢に大勝し、筒井城を再び奪い返す。
1576	天正4	順慶、信長より大和の支配を任される。
1577	天正5	久秀・久通父子、信長に背き信貴山城へ立て籠もるが、織田勢に攻められ自害する。
1579	天正7	筒井城へ多聞山城の石が運び込まれる。
1580	天正8	信長より、大和一国破城と指図検地が命じられる。大和の城郭は郡山城を残して全て破却される。筒井城も破却されて、順慶は郡山城へ移る。
1582	天正10	本能寺の変により信長は家臣の明智光秀に殺される。順慶、光秀の出兵要請に応じず。
1584	天正12	順慶が亡くなる。義子の定次が家督を嗣ぐ。
1585	天正13	定次、伊賀へ国替となる。羽柴秀長が郡山城に入城する。

表3 筒井氏・筒井城関連年表（金松誠氏作成）

III 調査の契機および経過

大和郡山市では筒井城跡を市内の重要遺跡と位置付け、その保存と活用に関して府内に検討委員会を設け協議を続けているところである。さらに、平成14年度においては関西の城郭研究の中核をなす城郭談話会に「筒井城総合調査」を依託し、文献・城郭史・考古学など多方面から筒井城の研究を行った。

さらに、筒井城の正確な復元を行うに際しては、明確な問題意識に基づく発掘調査を継続的に実施する必要がある。今回の調査はその第一回目として、城郭中心部分（主郭）と推定される字「シロ」の周辺を発掘し、堀などの主郭周縁施設の実態把握等を主目的に実施したものである。調査は平成15年2月27日に開始し、3月31日に終了した。

IV 調査の概要

（1）調査区の設定

今回の調査は、基本的には主郭を取り巻く内堀の検出・調査を目的とする第1トレンチと、主郭の高まりの基本層序、および造構面の基本データを得ることを目的とする第2トレンチを設定



図8 調査地位置図 (S : 1/2,000)

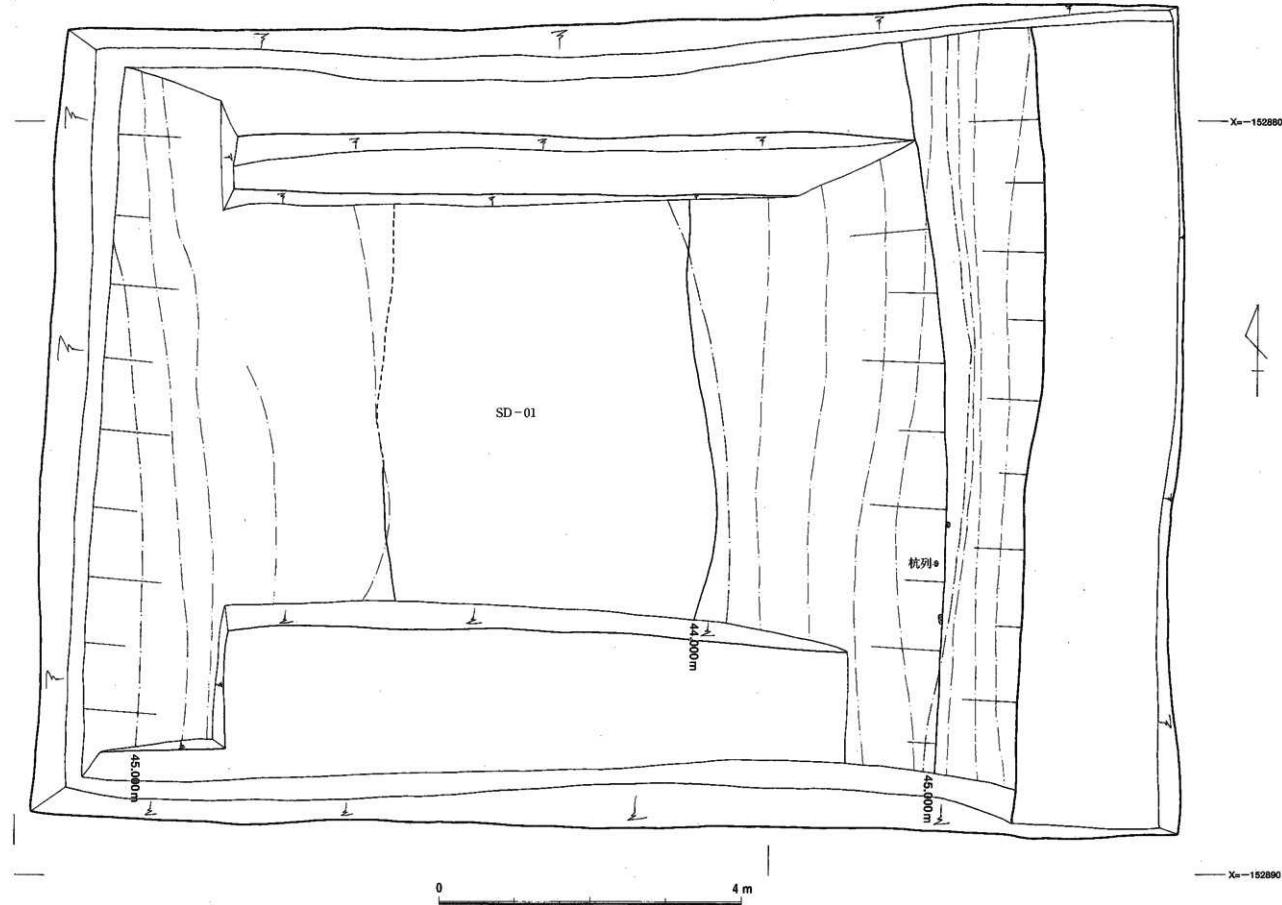


図9 第1トレンチ SD-01 平面図 (S:1/50)

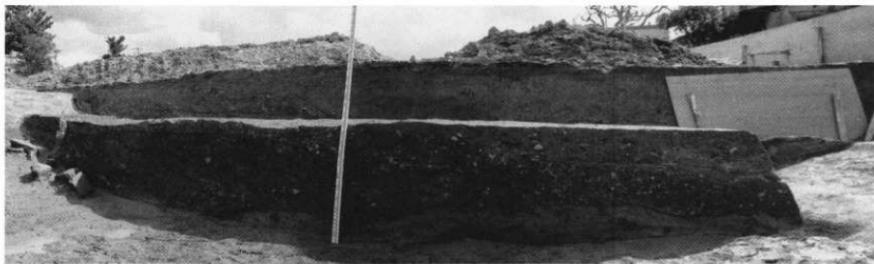


図10 第1トレーナー SD-01 土層

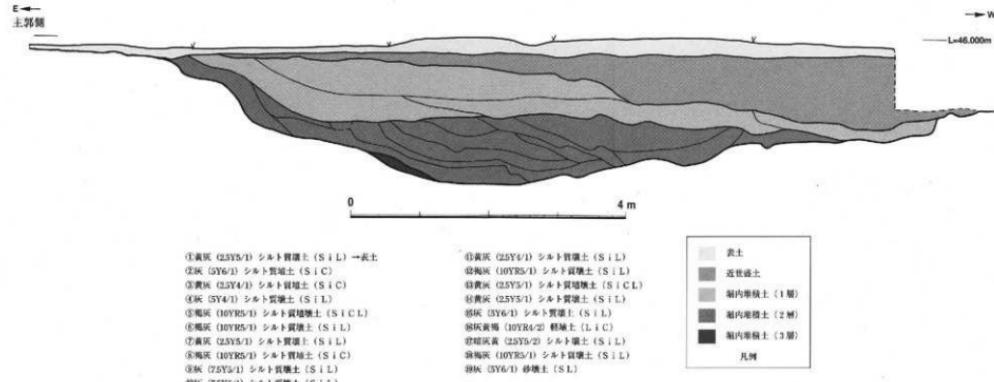


図11 第1トレーナー SD-01 土層図 (S:1/50)

して行った。また、後述の通り、第1トレンチでの所見を基に、主郭部分削平の確定的な所見を得るため、第3トレンチを補足的に設定した（図8）。以下、各トレンチ毎にその主要な知見を記す。

（2）第1トレンチ（図9）

従前、現地形や地籍図の検討からその存在が推定されていた、主郭を取り囲む堀（内堀）の実態把握を主目的に設定した南北約11m、東西約15mを測る東西方向のトレンチである。

SD-01は第1トレンチにおいて検出された大型の溝状遺構である。その方向性（図8参照）から筒井城主郭部分を取り囲む西側の堀跡（内堀の一部）と推定される。検出された堀の上面幅は約12mにも及ぶが、堀の東壁上部が削平されており（後述）、西壁上端が現里道の下となるため今回未検出であったことを勘案すれば、さらにこの堀の上面幅は広くなるものと思われる（14m程度？）。深さは検出面から約2mを測るが、後述する主郭部分からの比高は3m以上となる。

断面の形状はいわゆる「箱堀」形態を為すものである（図10、11）。東側（主郭側）の斜面については、下部の傾斜は比較的緩やかであるが、上半は急な斜面となっており、後述のように本来は主郭のレベル（検出した堀の上端から+1m程度）まで急な斜度で立ち上がっていたものと推定される。なお、この傾斜変換線部分には杭が3本残存しており（図版3-2）、ここに矢板などの壁面崩落防止施設が設けられていた可能性を示している。

堀の埋土は東側（主郭側）から人為的に運び込まれており、地山のブロック土を大量に含む。このことから、本遺構（堀）の埋め戻しは主郭部分を破壊（削土）して行われた可能性が高いものと推定される（この点は後述の第3トレンチの調査によってほぼ証明できた）。またこのことは、堀の埋め戻し（=削平）以前の主郭形態は現在残る字「シロ」部分の形状とは異なっていたことを意味する。

堀の埋土内から出土した遺物には土器・陶磁器や五輪塔などの石造物、瓦のほか、切断された梁などの建築部材などがある。このうち主として土釜および瀬戸・美濃焼天目茶碗の型式から、堀の埋め戻しは16世紀中葉頃に行われたものと推定される。埋土は大きく二層に分かれるが、この両者は出土遺物から見て顕著な時期差を指摘することはできない。また、埋土内ではなく、堀の東側斜面（主郭側）から人為的に並べ置かれたような状態で土師皿が数枚出土した（図版3-2）。これらは堀の埋戻しに伴う祭祀的行為に関係する遺物と思われる。これと先述の主郭の削土、五輪塔の廃棄などを勘案すれば、この堀の埋戻しは「破城」に関わる行為であったものと判断される（柴田2001）。

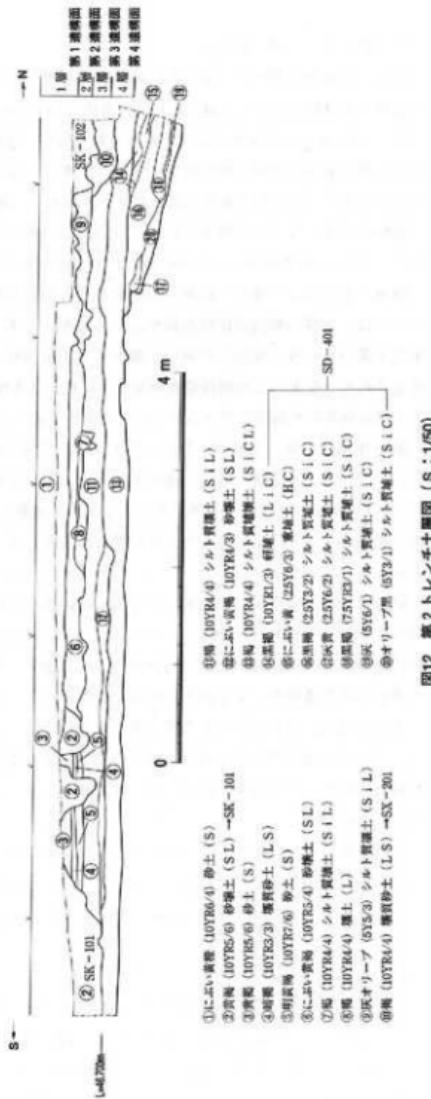
なお、堀の東側斜面に食い込むような形で鉄砲玉が一点出土した。これについては、堀の外から主郭に向かって発砲されたものと推定されるが、使用時期が他の遺物等から明確に判明する出土資料としては、きわめて古い段階のものである（第V章第1項参照）。

（3）第2トレンチ

主郭部分（字「シロ」）に設定した本トレンチは、主郭部分の基本層序および遺構面の確認を主目的に設定した、南北約10m、東西約5mを測る南北方向のトレンチである。調査の結果、遺構面を4面（時期は6時期）およびそれらを被覆する人為的な盛土を4層確認した（図12）。

①第1遺構面（図13）

ピットおよび不定形の土坑を数基検出している。ピットには根石を有するものなど、掘立柱建物の柱穴と推定されるものもあるが、調査面積の制約もあって建物としてのまとまりを明確に押



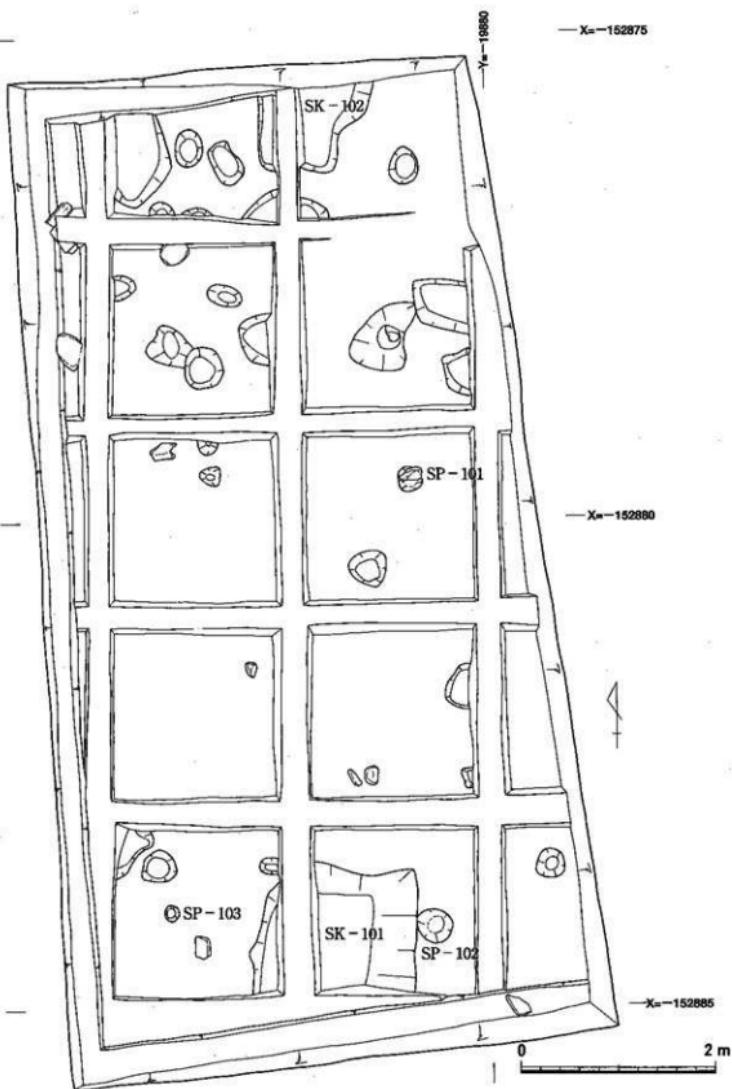


図13 第2トレンチ第1造構面平面図 (S : 1/50)

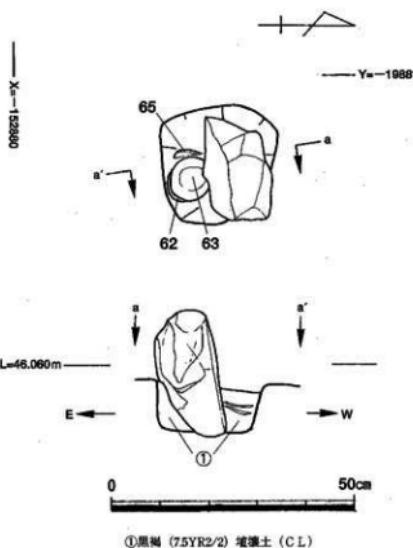


図14 SP-101 遺物出土状況および土層断面図 (S : 1/10)

さることはできなかった。以下、個別の主な遺構について述べる。

SP-101 (図14)

最大径が25cmを測る不整円形のピットである。深さは約10cm。内部から完形の土師皿が4点、重ねた状態で出土した（図30-62~65）。また、自然石が本ピット内に落ち込んだような状態で出土しており、その先端は遺構の底面に接している。

SP-102 (図15)

直径約37cmを測る、平面形がほぼ円形を呈するピットである。深さは約18cm。内部から土師皿が10点程度まとまって出土した（図化可能なものは7個体=図30-66~72）。埋土は1層に限られる。

SP-103 (図16)

直径約15cm深さ約3cmを測る、ひじょうに小規模なピットである。土師皿が1個体、伏せた状態で出土しており（図30-74）、ピットの規模はちょうどこの土師皿を納める大きさである。

なお、上記したピットの性格については、完形に近い土師皿が出土していることから、地鎮などの祭祀的性格を有する可能性が強い。また、他のピットには本遺構面の廃絶に伴うとみられる焼土や炭化物（後述）を含むものがあったが、この両遺構の埋土中にはそれらが全く含まれていないことから、出土した土師皿の示す年代観（SD-01出土の土師皿に若干先行？）は本遺構面の上限に近いものと捉えてよかろう。

この第1遺構面を被覆するのが1層である。当該層には焼土塊（図17）や炭化物が多量に含まれているほか、完形に近い瓦（図31-76・77）などが出土している。遺物や土層の観察から、第1遺構面は被災（落城？）後まもなく整地され、

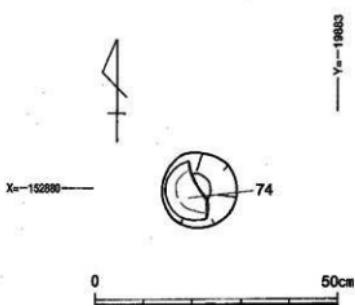


図16 SP-103 遺物出土状況 (S : 1/10)

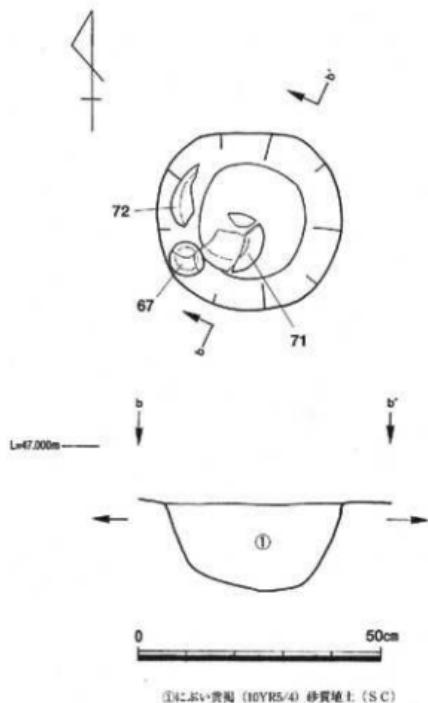


図15 SP-102 遺物出土状況および土層断面図 (S : 1/10)



図17 第1層に混じる焼土塊

上面を砂質土層（1層）でバッ
クされたようである。

②第2造構面（図18）

本造構面からはピット数基の
ほか、不定形の落ち込み（SX-
201）を検出した。なお、この面
を被覆する2層は比較的薄く、
出土遺物も少なかった（図30-
78～83）。

SX-201（図18）

トレンチ北端付近から検出さ
れた落ち込みであり、全体の形
状は知り得なかった。深さは30
cm以上。内部から土師皿を主体
とする遺物がまとまった量出土
した（図30-84～92）。土師皿の
形状は、先述のSP-101～103出
土のものに明らかに先行し、15
世紀代のものと思われる。ただ
し、時期観を明確にし得る遺物
が出土しなかつたため詳細な時
期は不明である。

③第3造構面（図19）

小規模な掘立柱建物の柱穴と
思われるピットが数基検出され
ているが、建物の復元には至ら
なかつた。なお、本造構面を被
覆する3層からは13世紀中葉の
瓦器碗破片が、それらと同時期
と思われる土師皿と共に出土し

ているので（図30-93～99）、本造構面の下限はこの
頃に置くことができる。

④第4造構面

本造構面は地山であり、3時期の造構が存在する。
また、本造構面を被覆する4層中からは12世紀末～
13世紀前葉の瓦器碗破片が出土しており（図32-100
～109）、この造構面の下限時期を示している。以下、
時期毎に主要な造構の概要を述べる。

I期（図20）

SD-401

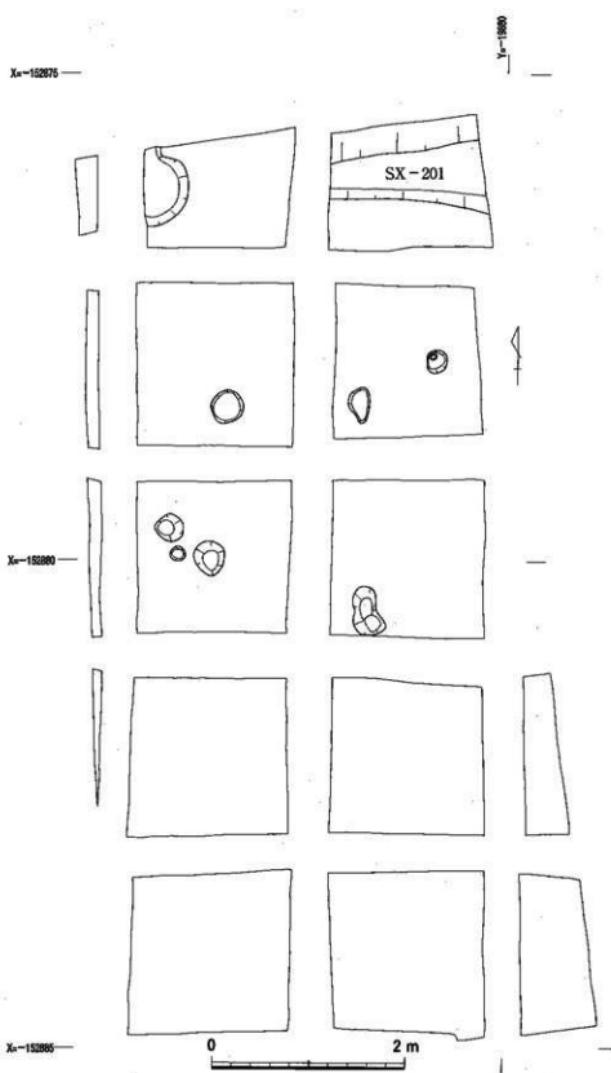


図18 第2トレンチ第2構造面平面図 (S : 1/50)

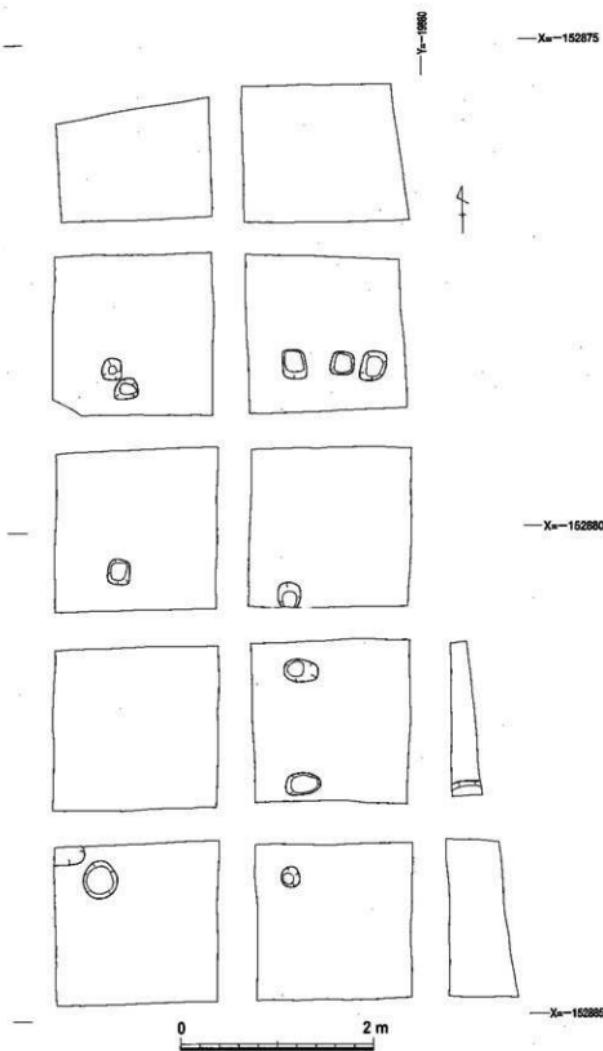


図19 第2トレンチ第3造構面平面図 (S : 1/50)

Xe-152875

Ye-152880

Xe-152880

Xe-152885

SD-401

0 2 m

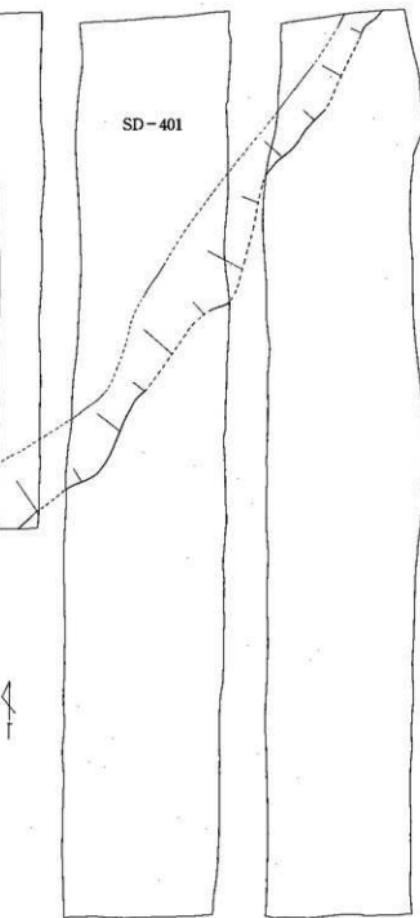
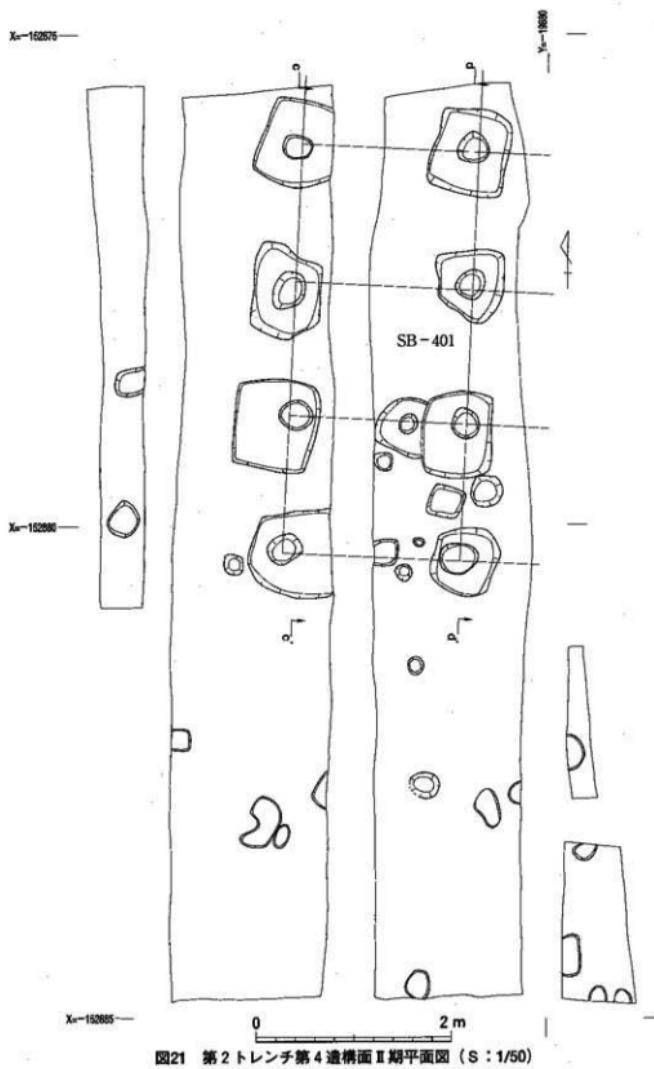


図20 第2トレンチ第4造構面I期平面図 (S : 1/50)



南西から北東の方向性を持つ遺構である。その平面形および断面形状から溝と推定するが、対岸部分が調査区外なので別種の遺構である可能性もある。幅は検出部分だけで3.5mを測る大規模なもので、深さは検出面から約50cmを測る。時期は出土した土師器から4世紀後葉と判断される。出土遺物の組成から見て、本遺構は墳墓に伴うものではなく、集落に関わる遺構であろう。

Ⅱ期（図21、22）

SB-401は柱間が尺等間（南北5尺・東西6尺）の柱立柱建物である。掘方の規模は70～90cm、柱穴は30cm程度の比較的大規模な建物であり、調査区外の北と東に拡がる。今回は南北3間、東西1間分を検出した。時期は、掘方内から出土した須恵器（図32-111）より7世紀中葉と判断される。この建物はその規模や正方位に近い方向性から判断して、何らかの公的施設の一部であった可能性がある。なお、掘方の平面規模に比較して、深さは20cm程度しかないことから、後述の耕地化の際に若干削平されているものかもしれない。

Ⅲ期（図23）

調査区の南半で幅20～50cm、深さ5cm程度の素掘小溝群が検出されている。小溝の底面は凹凸が見られ、それぞれの間隔などに規則性は認められない。⁽¹⁾ 時期は、上記した4層（12世紀末～13世紀初頭）に近いものと判断される。この素掘小溝の存在から判断して、ここは中世に居住地として利用される以前、耕作地（島）であったものと思われる。

（4）第3トレンチ

第IV章第2項で推定したように、堀（SD-01）が主郭部分を削土して埋められたとすれば、現存する主郭部の高まりと今回検出された堀の東肩までの間（約10m）には、堀が埋められた16世紀中葉以前の遺構は（井戸などの掘削深度が深いものを除く）存在しないはずである。本トレンチはその確認のために設定したもので、南北約11m、東西約2mを測る。精査の結果、遺構は全く検出されず、上記した推定を裏付けるものとなった。

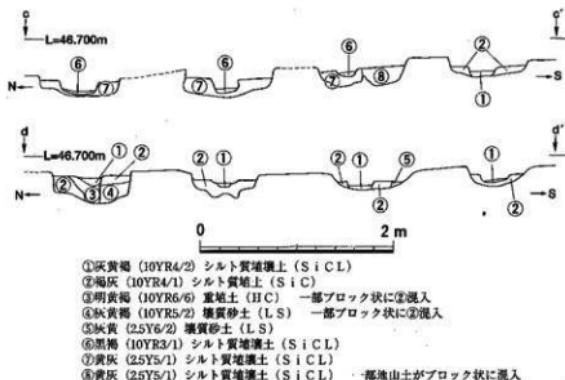


図22 第2トレンチ SB-401 柱列断面図 (S : 1/50)

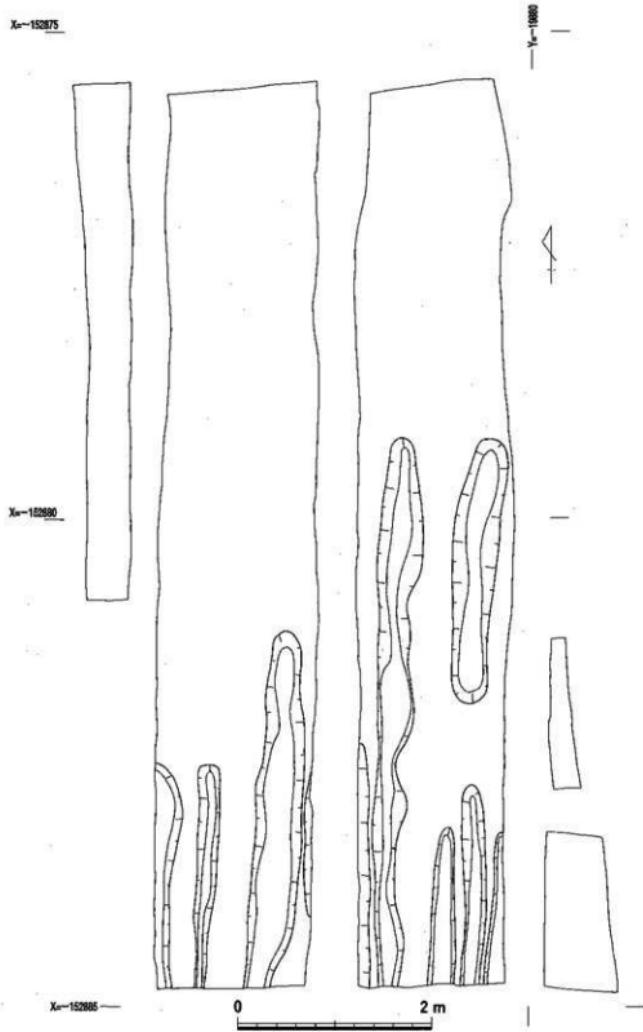


図23 第2トレンチ第4造構面Ⅲ期平面図 (S : 1/50)

(5) 小結

①主郭

中世以前の遺構

4世紀後葉の大規模な溝状遺構と7世紀初頭の掘立柱建物が検出されている。このうち後者は正方位の指向性を有し、規模も大きいものであることから、何らかの公的施設の一部とも考えられるものである。

中世の遺構

12世紀末～13世紀前葉には耕地（畠）としての利用がなされており、その後、13世紀中葉に居住域となる。居住域としての利用は16世紀中葉まで続くが、その頃に罹災した遺構面を埋戻した後、少なくとも今回の調査地では居住域としての利用がなされた痕跡はない。なお、城郭としての要素を強く感じさせる遺構・遺物としては焼土や炭化物があり、また地鎮など祭祀的性格を有するものと思われる土師皿の埋納遺構が検出されている。

②堀

現状で幅約12m、深さ約2mを測るもので、16世紀中葉に主郭部分を削土して人為的に埋戻されていた。またそれに伴って土師皿を用いた祭祀的行為が行われており、さらに五輪塔などの廢棄物も看取されることから、この堀の埋戻しは破城に関わる一連の行為であったものと思われる。

【注】

注1) 素掘小溝の機能差に基づく形状の違いについては山川2000参照。

【参考文献】

柴田龍司 2001 「幕末城・甚子城・良比宿込城 石塔を壇に投棄する」「城破りの考古学」吉川弘文館

山川均 2000 「大和郡山市中付田遺跡の発掘調査」『条里制・古代都市研究』16

V 遺物

(1) 第1トレンチSD-01出土遺物

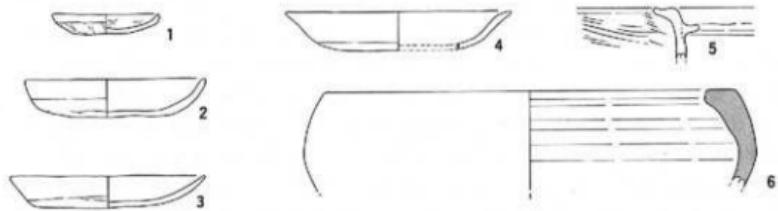
1層出土土器・陶磁器 (図24-1~6)

1～4は土師皿である。1は口径6.6cmと小型で、内面には板ナデ調整の後、不定方向のナデを施す。色調は灰黄色を呈する。2、3は口径12cmを測り、内面は底部を時計周りにナデた後、口縁部を同じく時計周りに強くナデ屈曲させる。外面には口縁部直下に接合痕が残る。色調は灰白色系である。本遺構出土遺物ではこのタイプが最も多い。4は口縁部が外反するタイプのものである。5は大和H型の土釜である(菅原1983)。鉢上は1cm強と短い。内面にはハケ調整を施している。6は瓦質土器の火鉢である。外面および上端には丁寧にミガキを施し、にぶい黄橙色を呈している。

2層出土土器・陶磁器 (図24-7~29)

7～20は土師皿である。7は1と同タイプのものと考えられ、胎土、色調、法量ともに近似している。8、9は口径が7～8cmと比較的小型で、口縁部に強くヨコナデを施し外反させている

1層



2層

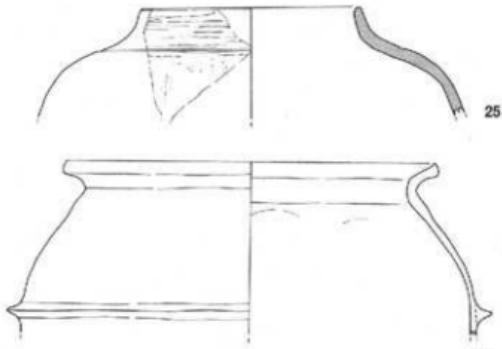
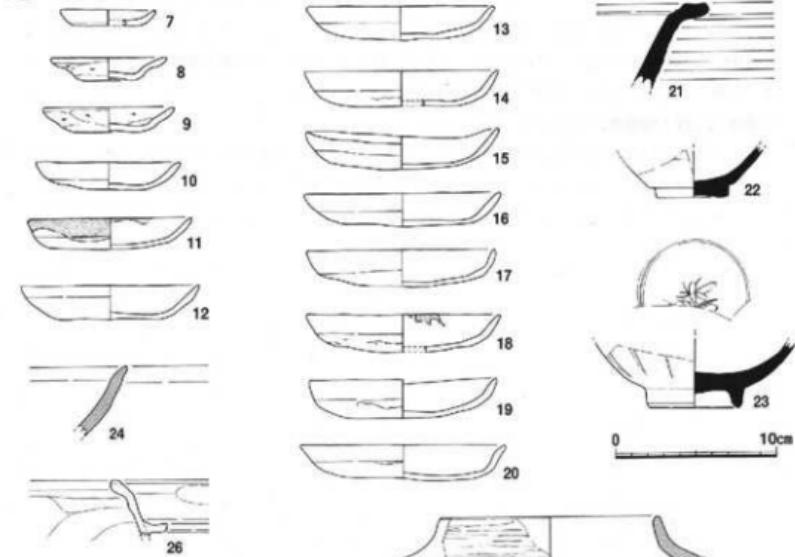


図24 第1トレンチ SD-011・2層出土遺物実測図 (S:1/3)

ため、内外面ともに段を有する。底部はあげ底ぎみになる。色調は灰黄褐色系である。9は口縁部の一部に煤が付着している。10は口径9.0cmで、口縁部はゆるやかに屈曲する。11は口径10.0cmで浅黄褐色を呈し、口縁部には煤が付着する。口縁部に煤が付着する例はこのタイプの土師皿が最も多い。12~20は2、3と同タイプのもので、口径が11~12cm程度で灰白~浅黄褐色のものが多い。19、20は底部に指頭圧痕が残る。21は古瀬戸折縁深皿で、藤澤編年古瀬戸後Ⅱ期（14世紀末）に属する（藤澤1991）。22は瀬戸・美濃焼天目椀である。高台周辺には銷鉛が施される。藤澤編年大室2期（16世紀中葉）のものである（藤澤2002）。23は龍泉窯系青磁椀で、外面は進弁文、内面には圈線内に花文を陰刻する。高台内には砂粒が付着している。14世紀。24は瓦質土器捕鉢で、体部外面をナデした後、口縁部にヨコナデを施す。1562年の金剛寺城の破却に伴なう一括資料とされている田原本町金剛寺遺跡SD-52出土品に近い形状を示している（藤田1988）。25は瓦質土器の茶釜で、外面にはミガキを施す。26は日型土釜。内面には指頭圧痕が残る。27はH型土釜である。鉢下には煤が付着する。28は捕磨型土釜である。外面下端には格子目タタキを施し、口縁端部は内側に折り返して収めている。29はI型土釜である。川口編年Ⅲ-1型式（16世紀中葉）に属する（川口1990）。外面全体に煤が付着している。

3層出土器・陶磁器（図25~30~53）

SD-01最下面の3層からは土師皿を中心とした遺物が多量に出土した。30~52は上師皿である。30は復元口径6.6cmの小型品であるが、全体的に5mm程度と厚みがある。31、32は8、9と同タイプの底部と口縁の境界に段を有し、あげ底ぎみになるものである。胎土には1~2mm程度の長石

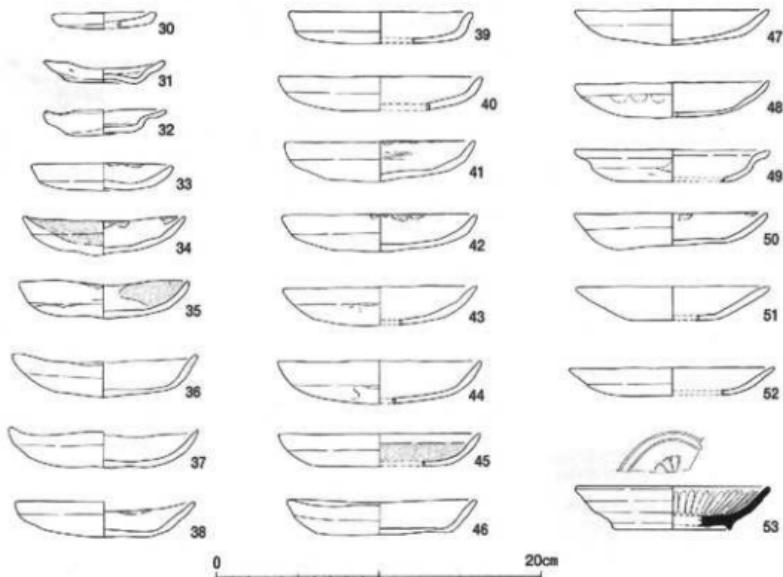


図25 第1トレンチ SD-01 3層出土遺物実測図 (S:1/3)

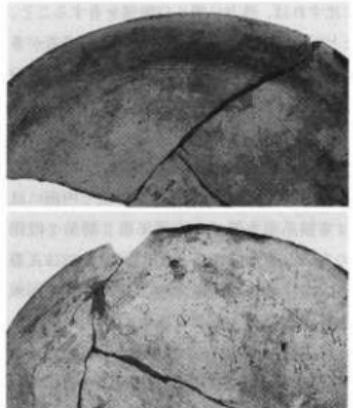


図26 内面のハケ調整痕および外面の接合痕 (No.41) その他の遺物 (54~61)

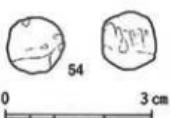


図27 第1トレンチ SD-01
出土鉄砲玉実測図 (S :
1/1)

以上がSD-01出土遺物であるが、1~3層まで遺物群の組成にさほど相違は見られず、これらは場の埋め戻し時に一括廃棄されたものと考えられる。時期的には16世紀中葉と考えられる。

(2) 第2トレンチ出土遺物

第1造構面出土遺物 (図30・31)

62~65はSP-101から出土した土師皿である。口径は8~9cm程度、浅黄橙色を呈する。底部は平坦で口縁は斜め上方に屈曲させる。66~72はSP-102出土の土師皿である。66は口径6cm程度になるとみられる小型品で、底部はあげ底になる。胎土は精良で灰白色を呈する。67は口径7.6cmを測り、底部は押圧により内面は若干あげ底になっている。浅黄橙色で口縁端部には煤が付着する。68、69は口径10cm程度のもので、口縁はやや外反する。70~72は口径13~14cmと大型で浅黄橙色を呈する。口縁部には2段階のヨコナデを施している。73はSK-101から出土したもので、70~72と同タイプのものである。74はSP-103、75はSK-102から出土した。これらは内面を板ナデ調整した後、口縁端部にヨコナデを施している。

76、77は第1造構面から出土した丸瓦である (図31)。いずれもコビキA (森田1984) で、凹面の玉縁連結部分には棒状のタタキ痕が見られる。凸面はミガキ調整を施す。77には吊り縫痕が残る。第1造構面に伴なう遺物は土師皿と丸瓦のみであり詳細な時期は不明である。しかし、第1ト

片が若干混じる。33は口径8.7cmで、にぶい黄橙色を呈する。34、35は口径10cm前後、口縁には煤が付着する。いずれも33よりは黄色い。36~48、50、52は口径がおおむね11~12cm程度の灰白色系のもので底部と口縁の境界には比較的明瞭な指頭圧痕が残るものが多い。39~41は内面を板ナデ調整した後、底部をナデ、口縁をヨコナデ調整している。45は内面が焼成されたように黒色化している。49は口縁端部に強くヨコナデを施し外反させている。51は口縁に広くヨコナデを施し、口縁は斜め上方にまっすぐ伸びる。53は漚戸・美濃焼丸皿である。内面にはソギがあり、底部内面には二重圓線内に印花文を有する。高台内には輪ドチ痕が残る。藤澤編年大窯2期。

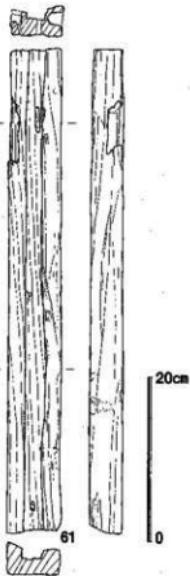


図28 第1トレンチ SD-01 痕が残る。85～92は土師皿。85は口径6.2cmの偏平なへそ皿で、浅黄橙色を呈する。86は口径8cm、底部は狭く口縁部は斜め上方に外反ぎみに立ち上がる。87～89は口径が12cm程度のもので浅黄橙色である。胎土は精良で口縁部と底部には明瞭な境界を持たずゆるやかに立ち上がる。90～92は口径14～15cm程度のもので、色調や胎土は87～89と近似しているが、底部は平坦で口縁部との境界を有する。器壁は3～4mmとひじょうに薄い。

3層出土遺物 (図30-93～99)

93～95は瓦器碗である。94、95の見込には螺旋状の暗文を有する。これらは川越編年Ⅲ-B型式(13世紀前葉)に属するものと考えられる。96～99は土師皿である。96、97は口径10cm、器高は2.4cmとやや深い。明褐色を呈する。98は復元口径12.2cm、にぶい黄橙色である。99は口径15.6cm、器高2.8cmを測る大皿で、底部を一方向にナデた後、口縁部には2段階のナデを施す。色調は99と大差ない。

4層出土遺物 (図32-100～110)

100～109は瓦器碗、110は瓦器皿である。105～107の見込には螺旋状暗文、108、109は連結輪状暗文を施す。これらは概ねⅢ-A型式(新)段階～Ⅲ-B型式(12世紀末～13世紀初頭)に属するものと考えられる。

第4造構面出土遺物 (図34-112～128)

111はSB-401出土の須恵器杯蓋である。小片であるので詳細は不明であるが、飛鳥II～III型式(7世紀中葉)に属する可能性が高い(古代の土器研究会編1992)。112～128はSD-401から出土した。112～117は土師器壺である。いずれも口縁端部は内側に肥厚させているが、112は端部を押さえ内傾させているのに対し114、115などはその内傾が比較的緩やかで水平方向に近い面をもつ。

ンチSD-01出土の土師皿に比すれば、外方に開く口縁部を有すること、胎土が密で器壁が薄い点などSX-201出土遺物から連続する要素が多くあるので、SD-01出土遺物よりも時期が遡る可能性が強い。16世紀前半か。

2層出土遺物 (図30-78～83)

78、79は土師皿で口径は約7cm、底部があげ底になるタイプである。赤褐色系で、胎土には雲母、長石粒が混じる。80は瓦器皿で内面には平行線状暗文を施す。81は東播系須恵器で森田編年第Ⅱ期第2段階(12世紀末～13世紀初頭)のものと考えられる(森田1995)。82は瓦器碗で川越編年Ⅲ-C型式のものであろう(川越1983)。83は瓦質土器風炉の脚と考えられる。底部にいたるまで外面にくまなくミガキを施し、非常に丁寧な作りで、「葵華焼」(村上1996)との関連から注目される資料である。脚の内面は凹んでおり、脚を本体に貼り付けた後、内側を抉り取りナデ調整したものと考えられる。

これらの遺物は第2造構面のSX-201よりも古い遺物を含んでおり、盛土内における下層遺物が混入しているものと考えられ、詳細な時期は不明である。

SX-201出土遺物 (図30-84～92)

84は土師器小型壺である。灰白色の精良な胎土で、外面には指頭圧痕が残る。85～92は土師皿。85は口径6.2cmの偏平なへそ皿で、浅黄橙色を呈する。86は口径8cm、底部は狭く口縁部は斜め上方に外反ぎみに立ち上がる。87～89は口径が12cm程度のもので浅黄橙色である。胎土は精良で口縁部と底部には明瞭な境界を持たずゆるやかに立ち上がる。90～92は口径14～15cm程度のもので、色調や胎土は87～89と近似しているが、底部は平坦で口縁部との境界を有する。器壁は3～4mmとひじょうに薄い。

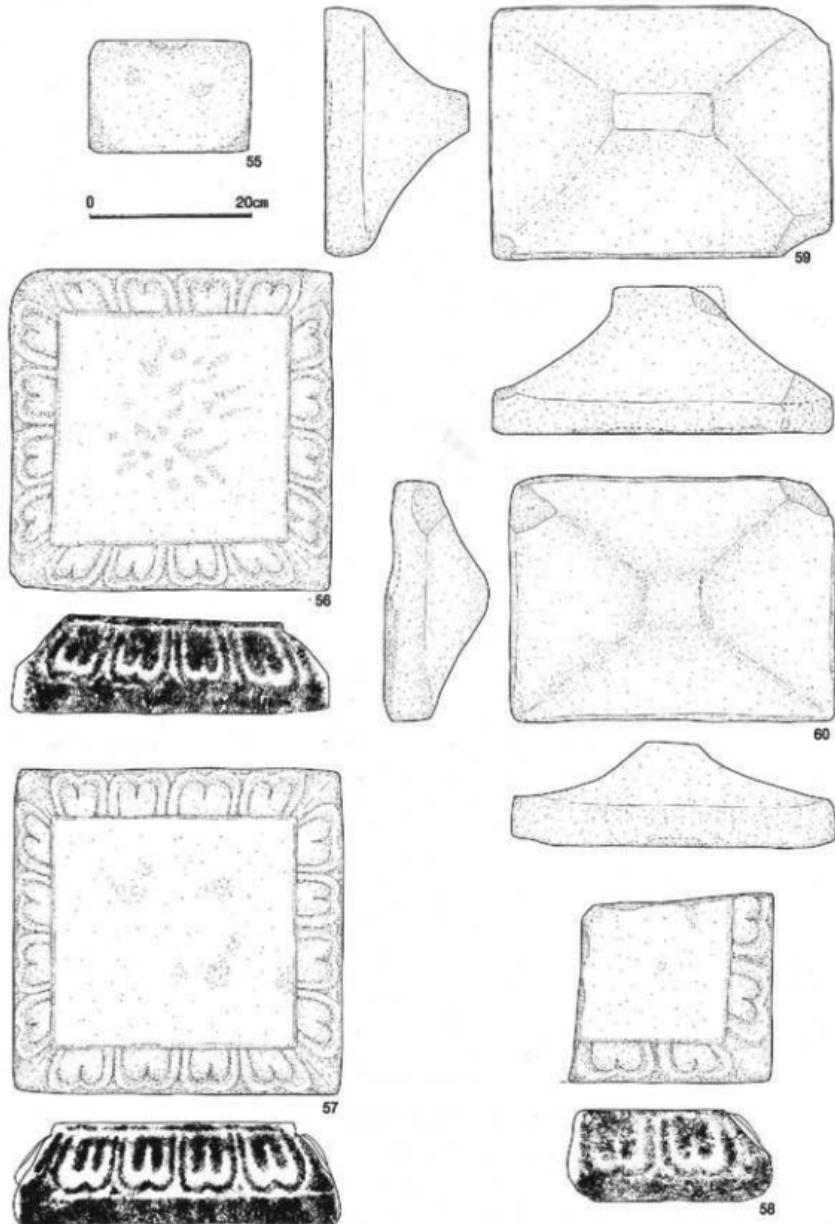


図29 第1トレンチ SD-01出土石造物実測図および拓影 (S:1/6)

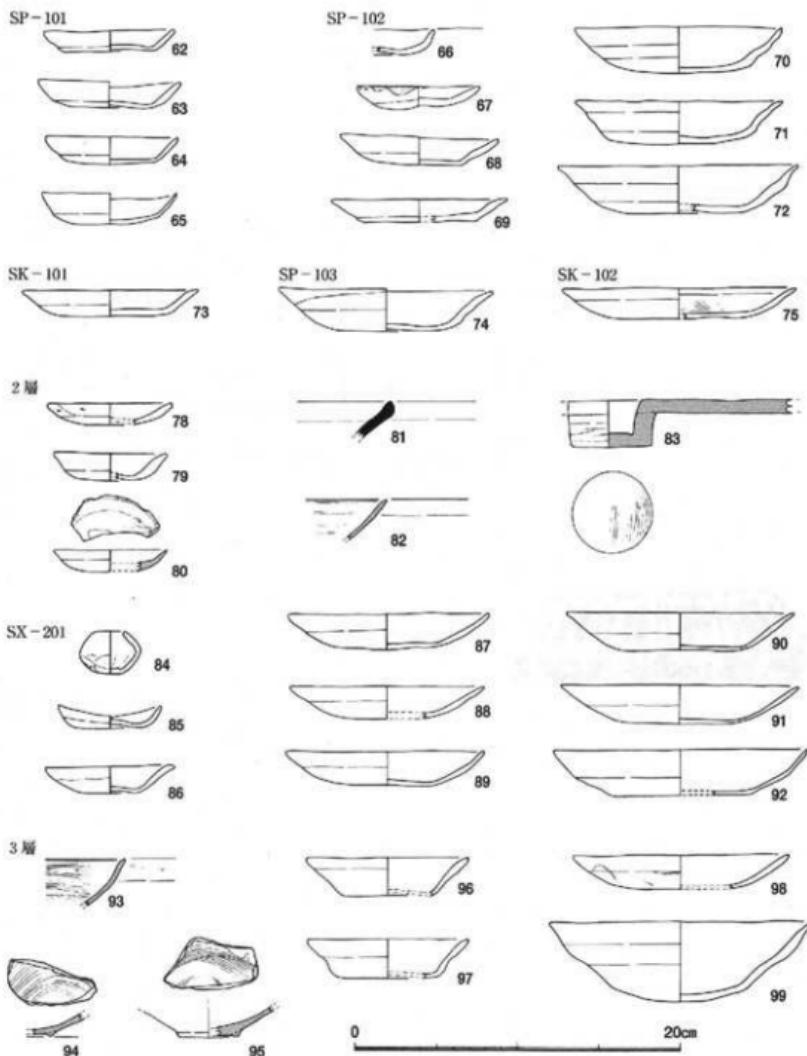


図30 第2トレンチ出土遺物実測図① (S : 1/3)

内面はケズリ調整を行っている。118～121は小型丸底壺である。120、121は外面下端部にケズリ調整を施す。122～125は土師器高杯である。122は脚部をミガキ調整し、123、124は脚部と杯部の境にハケ調整を施している。126～128は2層出土のものである。126は小型丸底壺。口径7.9を測り、口径に比して頭部径が比較的大きいものである。127は土師器壺。口縁上端部はゆるやかな面をも

つ。128は土師器高杯である。口径16.0cm、器高11.8cm、底径11.2cm。口縁は外方に大きく開き、脚部もゆるやかに外方に広がる。杯部外面はハケ調整の後、口縁部にヨコナデを施している。脚部の内面下端部にもハケ目が残る。これらの遺物は布留3式（4世紀第3四半期、寺澤1986）に属するものであろう。

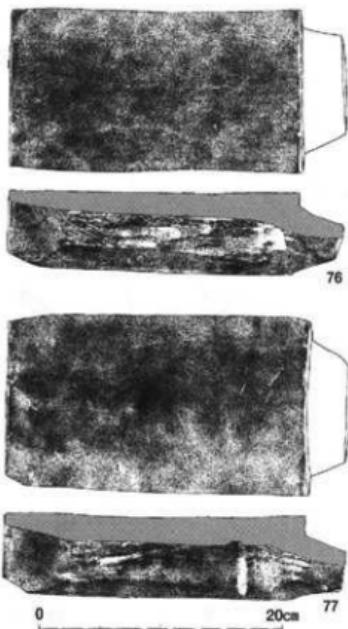


図31 第2トレンチ1層出土遺物実測図および拓影（S:1/4）

【参考文献】

- 川越俊一 1983「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」
『文化財論叢』
- 川口宏海 1990「16世紀における大和型土釜の動向」『中近世
土器の基礎研究』 VI
- 古代の土器研究会編 1992「都城の土器集成」
- 菅原正明 1983「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論
叢』
- 寺澤 勲 1986「畿内古式土師器の編年と二、三の問題」『矢
部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所
- 藤澤良祐 1991「瀬戸古窯址群II - 古瀬戸後期様式の編年一』
『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』 X
- 藤澤良祐 2002「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『（財）瀬戸
市埋蔵文化財センター研究紀要』 10
- 藤田三郎 1988「金剛寺道路発掘調査概報」田原本町教育委
員会
- 村上泰昭 1996「赤唐焼について」『（財）大和文化財保存会
収蔵品目録 南砺器物一赤唐焼一』
- 森田克行 1984「武津高櫻城」高櫻市教育委員会
- 森田 慎 1995「中世須恵器」中世土器研究会編『概説中世
の土器・陶磁器』真陽社

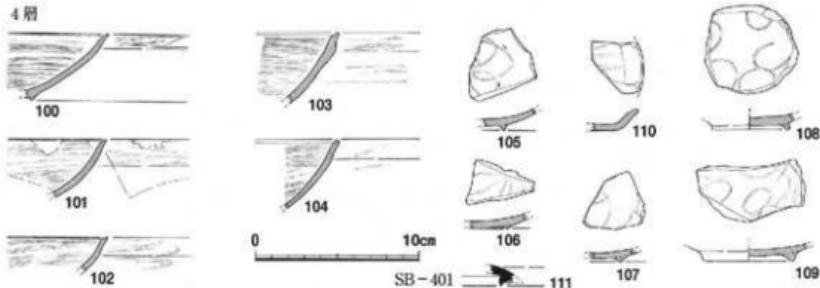


図32 第2トレンチ出土遺物実測図②（S:1/3）

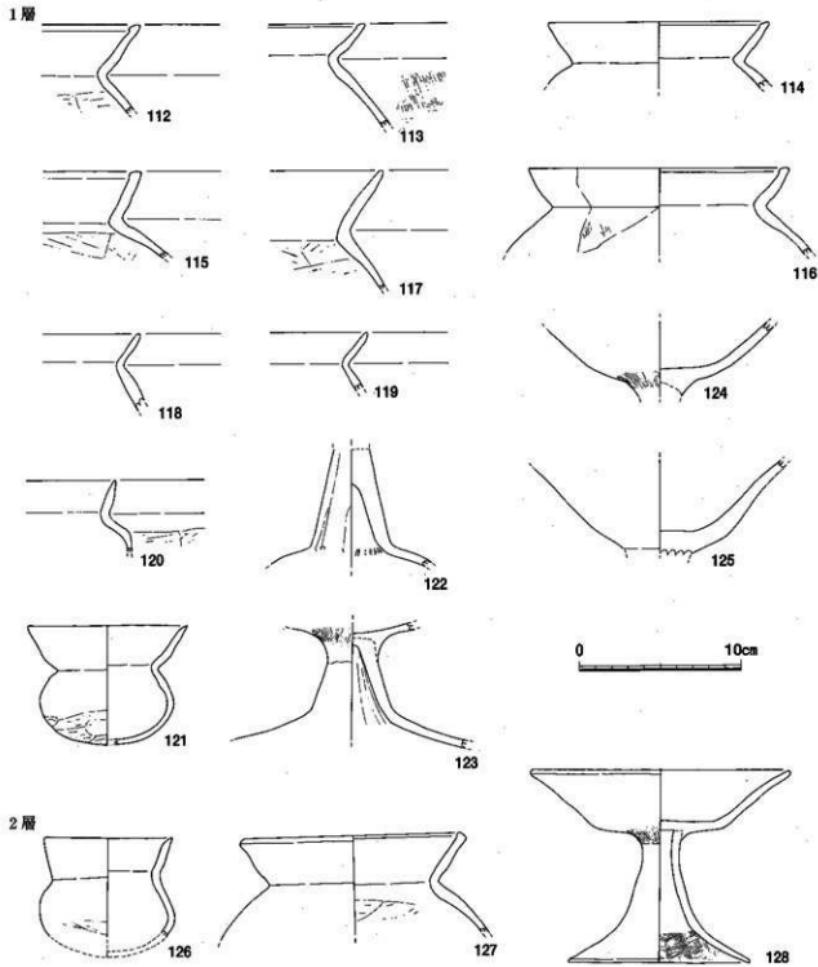


図33 第2トレンチ SD-401出土遺物実測図 (S : 1/3)

VII まとめ

今回の調査では、奈良県下で素掘のものとしては最大級の規模（幅）を有する堀が発見された。この堀は16世紀中葉には主郭部分の一部を破壊して人為的に埋戻されたものと推定されるが、今回の調査以前には、堀の埋没年代は筒井城が廃城となる天正8年（1580）頃であろうと予想されていただけに、この結果は意外なものであったといえよう。

それではこの時期にこうした城館自体の機能を著しく損なう行為（破城・城割り）がなされた背景には、いったい何があったのだろうか。「享禄天文之記」永禄2年（1559）8月6日条には以下の記載がある。

同六日筒井平城落ル、山ノ城へ上ルゝ、
松永弾正殿、戊亥脇超昇寺殿筒井ノ平城へ案内者トシテ本陣ニトル、

すなわち、永禄2年に筒井藤勝（後の順慶）がこの年に大和に侵攻してきた松永久秀により「筒井平城」を攻め落とされ、「山ノ城」（椿尾上城）へ逃れた。松永久秀は戊亥脇党（筒井が盟主であった武士団）の超昇寺氏の裏切りによる手引きで筒井城に入り、そこを本陣とした、というものである。^{注1)}先述の出土遺物の年代観（16世紀中葉）から推定して、堀の埋め戻しとそれに伴う主郭の切り崩し（破城）はこの事件が背景にあるものと見てよからう。松永方にすれば、大和支配の最大の支障となる筒井氏の居城をこの時にある程度破壊しておく意図があったものと考えられる。

しかしながら『多聞院日記』には松永がこの侵攻後に「筒井平城」を兵站基地などに利用している形跡があり、^{注2)}また後にここを奪い返す筒井順慶も天正8年までは基本的に筒井城を居城としている（表3参照）、堀の埋め戻し後（破城後）における筒井城の利用形態と、天正8年以後に順慶の居城となる郡山城の築城過程が改めて問題視されねばなるまい。

また、主郭に向けて打ち込まれたとみられる鉄砲玉は、永禄初年段階において、すでに鉄砲が京都周辺に基盤を有する武将間にはかなり普及していたことを予感させるし、視点を変えれば今回検出された堀の幅が例外的に広かったのは、この新兵器に抗するための手段であったともみることができよう。

以上のように、今回の調査は筒井城跡の変遷や構造をある程度明らかにしたのみならず、大和戦国史の一齣をひじょうに明確に印象付けるものとなった。松永などの外部勢力の侵攻に備えて掘られた巨大な堀、そしてその終焉—破城が発掘調査によって明らかになったものと評価し得るだろう。

【注】

注1) 本史料の叢文および訳は金松誠氏による。

注2) 『多聞院日記』永禄9年（1566）3月17日条。

No.	器種名	出土地	計測値(cm)	胎土	色調	備考
1	土師皿	SD-01 1番	口(6.6) 高(1.2)	石英・長石粒微量含む	灰黒(25Y7/2)	
2	土師皿		口(12.0) 高(2.3)	石英・長石粒微量含む	浅黄褐(10YR8/3)	
3	土師皿		口(12.0) 高(2.0)	石英・長石粒微量含む	灰白(10YR8/2)	
4	土師皿		復口(14.0) 高(2.4)	石英・長石・チャート粒微量含む	浅黄褐(10YR8/3)	
5	H型土釜		-	石英・長石・角閃石含む	にぶい黄褐(10YR7/2)	
6	瓦質土器火鉢		復口(25.4)	石英・長石粒微量含む	灰黄褐(10YR6/2)	
7	土師皿		復口(6.0) 高(1.0)	石英・長石粒微量含む	灰黒(25Y6/2)	
8	土師皿		復口(7.0) 高(1.4)	石英・長石・チャート含む	にぶい黄褐(10YR7/2)	
9	土師皿		復口(8.0) 高(1.5)	石英・長石・チャート微量含む	にぶい黄褐(10YR7/2)	
10	土師皿		口(9.0) 高(1.7)	石英・長石・チャート微量含む	にぶい黄褐(10YR7/2)	
11	土師皿	SD-01 2番	口(10.0) 高(1.9)	石英・長石・チャート微量含む	灰黒(25Y6/2)	口縁に剥付有
12	土師皿		復口(11.0) 高(2.1)	石英・長石・チャート含む	浅黄褐(10YR8/3)	
13	土師皿		口(11.7) 高(2.1)	石英・長石微量含む	浅黄褐(10YR8/3)	
14	土師皿		復口(11.0) 高(2.2)	石英・長石微量含む	浅黄褐(10YR8/3)	
15	土師皿		口(12.0) 高(2.5)	石英・長石・チャート微量含む	浅黄褐(10YR8/3)	
16	土師皿		口(12.0) 高(2.1)	石英・長石微量含む	灰白(10YR8/1)	
17	土師皿		口(11.6) 高(2.3)	石英・長石微量含む	灰白(25Y8/2)	
18	土師皿		復口(12.0) 高(2.3)	石英・長石微量含む	浅黄褐(10YR8/3)	
19	土師皿		口(10.5) 高(2.4)	石英・長石・チャート微量含む	にぶい黄褐(10YR7/2)	
20	土師皿		口(12.6) 高(2.2)	石英・長石微量含む	灰白(25Y8/1)	
21	瓶・尖底瓶		-	特良	オリーブ灰(5Y6/3)	
22	瓶・美濃天目碗		底(4.4)	特良	灰褐(5Y4/2)	大室2
23	龍泉系青磁碗		底(5.6)	特良	オリーブ灰(10Y6/2) [断] 灰白(N8/0)	
24	瓦質土器壺鉢		-	石英・長石粒微量含む	暗灰(3N3/0) [断] 灰白(5Y8/1)	
25	瓦質土器茶釜		復口(17.6)	石英・長石含む	黄灰(25Y6/1)	
26	H型土釜		-	石英・角閃石・チャート微量含む	灰白(10YR8/2)	
27	G型土釜		-	石英・長石・チャート含む	灰白(10YR8/2)	
28	播磨土鍋		-	長石・チャート含む	にぶい橙(7.5YR7/4)	
29	I型土釜		復口(22.8) 鋸鉢(30.0)	石英・長石微量含む	灰白(10YR8/2)	Ⅲ-1型式
30	土師皿	SD-01 3番	復口(6.6)	石英・長石微量含む	灰白(10YR8/2)	
31	土師皿		口(7.6) 高(1.4)	石英・長石・チャート含む	にぶい黄褐(10YR7/3)	
32	土師皿		口(7.4) 高(1.5)	石英・長石微量含む	浅黄褐(10YR6/2)	
33	土師皿		口(8.7) 高(1.7)	石英・長石・角閃石含む	にぶい黄褐(10YR7/2)	口縁に剥付有
34	土師皿		口(10.0) 高(2.2)	石英・長石微量含む	にぶい黄褐(10YR7/4)	口縁に剥付有
35	土師皿		口(10.4) 高(2.3)	石英・長石微量含む	浅黄褐(10YR8/2)	口縁に剥付有
36	土師皿		口(11.4) 高(2.6)	石英・長石微量含む	灰白(10YR8/2)	
37	土師皿		口(11.7) 高(2.4)	石英・長石微量含む	灰白(10YR8/2)	
38	土師皿		口(11.0) 高(2.2)	石英・長石微量含む	灰白(10YR8/2)	口縁に剥付有
39	土師皿		復口(11.4) 高(2.0)	石英・長石微量含む	灰白(10YR8/2)	
40	土師皿	SD-01 4番	口(11.6) 高(2.3)	石英・長石微量含む	灰白(25Y8/2)	
41	土師皿		復口(11.7) 高(2.5)	石英・長石微量含む	灰白(10YR8/2)	
42	土師皿		口(12.0) 高(2.3)	石英・長石微量含む	にぶい黄褐(10YR7/2)	
43	土師皿		口(12.0) 高(2.3)	石英・長石微量含む	灰白(10YR8/2)	
44	土師皿		口(12.6) 高(2.6)	石英・長石微量含む	灰白(10YR8/2)	
45	土師皿		口(12.4) 高(2.0)	石英・長石微量含む	灰黄褐(10YR6/2)	口縁に剥付有
46	土師皿		復口(11.6) 高(2.2)	石英・長石微量含む	灰白(10YR8/2)	
47	土師皿		口(12.0) 高(2.1)	石英・長石微量含む	灰白(10YR8/2)	
48	土師皿		復口(12.0) 高(2.1)	石英・長石微量含む	灰白(25Y8/1)	
49	土師皿		口(12.0) 高(2.0)	石英・長石微量含む	灰白(25Y8/1)	
50	土師皿	SD-01 5番	口(11.9) 高(2.0)	石英・長石微量含む	灰白(10YR8/2)	
51	土師皿		口(12.0) 高(2.0)	石英・長石微量含む	灰白(25Y8/1)	
52	土師皿		口(12.6) 高(1.7)	石英・長石微量含む	灰白(10YR8/2)	
53	瓶・美濃丸皿		復口(11.8) 高(2.7) 底 (7.6)	特良	オリーブ灰(10Y6/2) [断] 灰白(10YR8/2)	大室2
54	銀鏡玉		長(1.12) 幅(1.05) 厚 (7.68)	-	-	
55	五輪塔地輪		20×19 高(12.8)	-	-	花崗岩
56	反花座		39.0×37.2 高(12.2)	-	-	花崗岩
57	反花座		40×40 高(12.6)	-	-	花崗岩
58	反花座		高(11.3)	-	-	花崗岩
59	猪仔壓模		42×36 高(19)	-	-	花崗岩
60	猪仔壓模		40×20 高(12.7)	-	-	花崗岩

表4 遺物観察表1

No.	器種名	出土地	計測値(cm)	胎土	色調	索考
61	建築部材	SD-01 2層	長(58.4) 幅(6.4) 厚(3.8)	-	-	針葉樹
62	土師皿	SP-101	口(7.9) 高(1.3)	石英・長石・角閃石微量含む	にぶい緑(7.5Y R7/4)	
63	土師皿		口(8.6) 高(1.6)	石英・長石微量含む	浅黄緑(7.5Y R8/4)	口縁に保付着
64	土師皿		口(9.2) 高(1.7)	石英・長石・角閃石微量含む	浅黄緑(7.5Y R8/4)	
65	土師皿		口(8.2) 高(2.9)	石英・長石・チャート微量含む	浅黄緑(7.5Y R8/3)	
66	土師皿	SP-102	高(2.0)	長石・角閃石微量含む	灰白(2.5Y T/1)	
67	土師皿		口(7.6) 高(1.2)	長石・角閃石微量含む	浅黄緑(7.5Y R8/4)	口縁に保付着
68	土師皿		口(9.8) 高(1.8)	長石・角閃石微量含む	浅黄緑(7.5Y R8/3)	
69	土師皿		復口(10.8) 高(1.4)	石英・長石・角閃石・チャート微量含む	黄灰(2.5Y 4/1)	
70	土師皿		口(13.6) 高(2.8)	長石・チャート・角閃石微量含む	浅黄緑(10Y R8/3)	
71	土師皿	SK-102	口(12.8) 高(2.6)	石英・長石・チャート・角閃石微量含む	浅黄緑(10Y R8/3)	
72	土師皿		口(14.8) 高(3.0)	石英・長石・チャート・角閃石微量含む	浅黄緑(10Y R8/3)	
73	土師皿	SK-101	復口(10.8) 高(1.6)	石英・長石・チャート・角閃石含む	浅黄緑(10Y R8/3)	
74	土師皿	SP-103	復口(13.2) 高(2.7)	石英・長石・チャート・角閃石微量含む	浅黄緑(10Y R8/3)	
75	土師皿	SK-102	復口(14.4) 高(1.9)	石英・長石・チャート微量含む	浅黄緑(10Y R8/3)	
76	丸瓦	第2トレンチ 1層	長(27.6) 広幅幅(12.8) 玉縁長(3.6) 玉縁幅(5.2)	長石・チャート・石英微量含む	灰(N5/0)	
77	丸瓦		長(28.2) 広幅幅(14.5) 玉縁長(3.4) 玉縁幅	長石・チャート・石英微量含む	灰(N5/0)	
78	土師皿		復口(6.8) 高(1.3)	長石・雲母・チャート含む	澄(5Y R6/6)	
79	土師皿		復口(7.0) 高(1.7)	雲母・長石微量含む	にぶい赤褐(5YR5/4)	
80	瓦器皿	第2トレンチ 2層	復口(7.0) 高(1.3)	精良	灰(N5/0) [断] にぶい黄緑(10Y R7/2)	
81	東播系須恵器		-	精良	灰(N5/0)	
82	瓦器皿		-	精良	灰(N5/0)	
83	瓦質土器風炉		-	石英・長石・チャート・雲母含む	にぶい黄緑(10Y R7/4) ~黒(10YR7/1)	
84	土師器小型壺	SX-201	口(1.8) 高(2.6) 脚(3.8)	石英・長石・チャート微量含む	灰白(2.5Y R8/1)	
85	土師皿		口(6.2) 高(1.4)	精良	浅黄緑(10Y R8/3)	
86	土師皿		口(8.0) 高(1.6)	長石・チャート・雲母含む	澄(7.5Y R7/6)	
87	土師皿		口(12.3) 高(2.2)	精良	浅黄緑(10Y R8/3)	
88	土師皿		口(12.1) 高(2.1)	精良	浅黄緑(10Y R8/4)	
89	土師皿		復口(12.0) 高(2.1)	精良	浅黄緑(10Y R8/4)	
90	土師皿		復口(14.0) 高(2.3)	精良	浅黄緑(10Y R8/4)	
91	土師皿		復口(14.6) 高(2.4)	精良	浅黄緑(10Y R8/4)	
92	土師皿		復口(15.6) 高(2.8)	精良	浅黄緑(10Y R8/4)	
93	瓦器壺		-	精良	灰(N5/0) [断] 灰白(2.5Y R8/1)	III-B型式
94	瓦器壺	第2トレンチ 3層	-	精良	灰(N5/0) [断] 灰白(2.5Y R8/1)	III-C型式
95	瓦器壺		復底(3.6)	精良	灰(N5/0) [断] 灰(5Y R8/1)	III-B型式
96	土師皿		口(10.0) 高(2.4)	石英・長石・雲母・チャート含む	澄(5Y R6/6)	
97	土師皿		口(10.0) 高(2.4)	石英・長石・雲母・チャート含む	明赤褐(5YR5/8)	
98	土師皿		復口(12.2) 高(2.1)	石英・長石微量含む	にぶい黄緑(10Y R7/4)	
99	土師皿	第2トレンチ 4層	復口(16.0) 高(4.9)	石英・長石微量含む	浅黄緑(7.5Y R8/4)	
100	瓦器壺		-	精良	灰(N5/0) [断] 灰(5Y R8/1)	III-B型式
101	瓦器壺		-	精良	灰(N5/0) [断] 灰(5Y R8/1)	III-B型式
102	瓦器壺		-	精良	灰(N5/1) [断] 灰(5Y R8/1)	III-B型式
103	瓦器壺		-	精良	灰(N5/0) [断] 灰(5Y R8/1)	III-B型式
104	瓦器壺		-	精良	灰(N5/0) [断] 灰(5Y R8/1)	III-B型式
105	瓦器壺		-	精良	灰(N5/1) [断] 灰(5Y R8/1)	III-B型式
106	瓦器壺		-	精良	灰(N6/1) [断] 灰(5Y R8/1)	III-B型式

表5 遺物観察表2

No	器種名	出土地	計面積(cm)	胎土	色調	備考
107	瓦器輪	第2トレンチ 4番	-	精良	灰(N4/1) [断] 灰(5Y R8/1)	II-B型式
108	瓦器輪		底(4.6)	精良	灰(N5/1) [断] 灰(5Y R8/1)	II-B型式
109	瓦器輪		底(5.4)	精良	灰(N5/1) [断] 灰(5Y R8/1)	II-B型式
110	瓦器皿		-	精良	灰(N5/1) [断] 灰(5Y R8/1)	
111	須恵器杯蓋	SB-401 柱穴堤方	-	精良	灰(N5/0)	
112	土師器甕	SD-401 1番	-	石英・長石・チャート・角閃石含む	浅黄橙(10Y R8/3)	
113	土師器甕		-	長石・チャート多く含む	にぶい黄橙(7.5Y R7/4)	
114	土師器甕		復口(13.7)	石英・長石・チャート多く含む	にぶい橙(7.5Y R7/4)	
115	土師器甕		-	石英・長石・チャート・紫母・角閃石含む	にぶい橙(10Y R7/4)	
116	土師器甕		復口(16.3)	長石・チャート含む	にぶい黄橙(10Y R7/4)	
117	土師器甕		-	石英・長石・チャート多く含む	にぶい黄橙(10Y R7/4)	
118	土師器小型丸底甕		-	長石・チャート・クサリ難多く含む	浅黄橙(10Y R8/3)	
119	土師器小型丸底甕		-	石英・長石・角閃石含む	浅黄橙(10Y R8/4)	
120	土師器小焼丸底甕		-	石英・長石・角閃石・チャート含む	浅黄橙(10Y R8/3)	
121	土師器小型丸底甕		口(9.8) 高(7.3) 刷(8.2)	石英・長石・チャート・角閃石含む	にぶい黄橙(10Y R7/3)	
122	土師器高杯		-	長石・紫母多く含む	にぶい橙(5Y R6/4)	
123	土師器高杯		-	長石・チャート多く含む	淡赤橙(2.5Y R7/4)	
124	土師器高杯		-	長石・チャート多く含む	にぶい橙(7.5Y R7/4)	
125	土師器高杯		-	長石・チャート・クサリ難多く含む	にぶい橙(7.5Y R7/4)	
126	土師器小型丸底甕	SD-401 2番	口(7.9)	長石・角閃石含む	にぶい橙(5Y R7/3)	
127	土師器甕		口(14.0)	石英・長石・角閃石・紫母含む	にぶい橙(7.5Y R7/4)	
128	土師器高杯		口(16.0) 高(11.8) 底(11.2)	石英・長石・チャート多く含む	浅黄橙(10Y R8/3)	

表6 遺物観察表3

【凡例】

口：口径 復口：復元口径 高：器高 底：底部径 刷：腹部径 [断] 断面色調

報告書抄録

ふりがな	ついじょうだい5じはくつちょうきほうこくしょ							
書名	筒井城第5次発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	大和郡市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	9							
編著者名	山川均・岡本智子							
編集機関	大和郡市教育委員会							
所在地	〒639-1007 大和郡市南郷町554-1							
発行年月日	2004年3月31日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯 °°°	東経 °°°	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ついじょう 筒井城第5次	ならけんやまとこおりやまし 奈良県大和郡市 ついちょうあざ 筒井町字シロ	29203				2003.2.27～ 2003.3.31	237	範囲確認
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
筒井城第5次	城館跡	古代～中世	溝（4世紀）、掘立柱建物（7世紀）、城館堀（16世紀）	土器、陶磁器、瓦、石造物		幅12m以上の堀検出		

筒井城第6次発掘調査報告

例　　言

1 本書は、大和郡山市筒井町字北垣内で実施した発掘調査の報告書である。

2 調査は、青空駐車場造成を契機として実施した。

3 調査期間、調査面積は下記の通りである。

調査期間 2003年3月19日～3月24日

調査面積 105m²

4 調査は以下の組織で実施した。

現地調査

調査員：山川均（大和郡山市教育委員会　社会教育課）

補助員：小澤晃子（当時奈良大学大学院）、岡本智子（奈良大学大学院）、下高大輔（奈良大学）

作業員：（有）ワーカー

事務

大和郡山市教育委員会　社会教育課

5 本書の編集は山川が行った。

6 調査に関わる写真・スライド・実測図および出土遺物は全て大和郡山市教育委員会で保管している。広く活用されたい。

7 現地調査に際しては、地元筒井町および順慶顕彰会の方々にはたいへんお世話になりました。
記して感謝いたします。

凡　　例

1 遺構実測図に示した標高は、東京湾平均海面（T.P）からのプラス値である。

2 遺構実測図中の座標は、世界測地系に基づくものである。また、図中矢印で記した方位は座標北を表す。

3 土色に関しては、『新版標準土色帳』に依拠した。

本文目次

I 調査の契機	43
II 調査の概要	43
III まとめ	43

図　　目　　次

図1 柱状図（S:1/20）	43
図2 内堀想定区域と削土想定区域	44

図 版 目 次

- 図版16 1 完掘状況（北より）
2 調査地航空写真（昭和38年撮影）

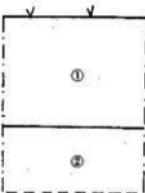
I 調査の契機

周知の遺跡である筒井城の主郭近辺において青空駐車場の造成が実施されることに伴い、地下遺構確認のための発掘調査を実施した。

II 調査の概要

発掘調査は青空駐車場予定地中心付近に南北35m、東西3mのトレンチを配して実施した（調査地点については12頁図8参照）。対象地は蓮畠であった関係上、事前に地盤改良工事が行われており、約50cmの改良土（畠耕土と地盤改良剤が攪拌されたもの）を除去すると地山面に至る（図1）。この地山面はバッタホー（改良工事で使用）のバケット先端によってかなり損傷を受けていた。

精査の結果、最終水期の堆積層とみられる泥炭層がかなりの面積で露呈しており、遺構は検出されなかった。これについては前記の通り地山が改良工事によって削平された部分もあるが、堆積土中に全く筒井城機能時期の遺物が含まれていなかつたことから判断して、かなり古い時期に遺構面が削平されたことを意味するものと思われる。



①暗灰質 (25Y4/2) シルト質壤土 (SICL)
→ハス池改良土
②灰灰質 (10YR4/2) シルト質壤土 (SICL)
→地山

図1 柱状図 (S:1/20)

III まとめ

今回の調査では筒井城機能時期の遺構や遺物は一切検出されていない。その理由については、この近接地で実施された第5次調査の第3トレンチが全くこれと同様の状況であった点が参考となるであろう。同トレンチは内堀の埋戻しのために主郭部分が削平された部分にあたると想定され、そのために遺構が全く存在しなかった。今回の調査対象地の南隣接地にも内堀の推定ラインが走っているので、調査対象地は内堀の埋戻しに際して削土された部分と考えてよからう（図2参照）。こうした堀の埋戻しとそれに伴う削土に関しては、戦国期における破城の実態を知る上で貴重である。今後も周辺の発掘調査を綿密に行う必要があらう。

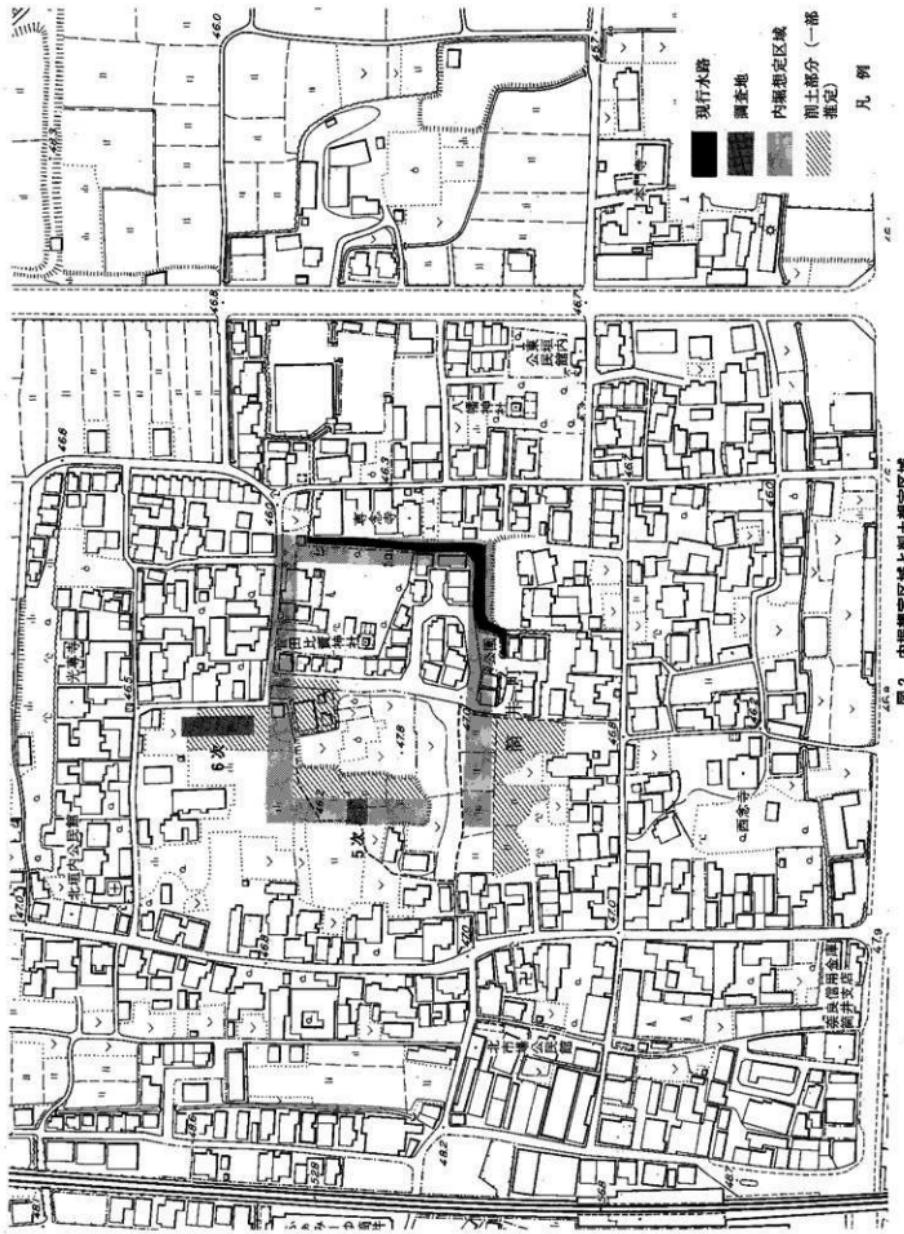


図2 内堀想定区域と削土想定区域

報告書抄録

ふりがな	ついじょうだい6じはくつちょうきばうこくしょ							
書名	筒井城第6次発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	大和郡山市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	9							
編著者名	山川均							
編集機関	大和郡市教育委員会							
所在地	〒639-1007 大和郡山市南郡山町554-1							
発行年月日	2004年3月31日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯 °°°	東経 °°°	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ついじょう 筒井城第6次	ならけんやまとこおりやまし 奈良県大和郡山市 ついちょうあざきたがいと 筒井町字北垣内	29203				2003.3.19～ 2003.3.24	105	駐車場造成
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
筒井城第6次	城館跡					削平により遺構は検出されなかった		

順慶五輪塔覆堂石造物・屋瓦調查報告

例　　言

- 1 本書は、大和郡山市長安寺町で実施した石造物および屋瓦の調査報告書である。
- 2 調査年月日は2003年6月3日および同年7月17日である。
- 3 調査は大和郡山市教育委員会社会教育課が実施した。
- 4 本書は以下の分担で作成した。
執筆：I, III…山川均、II-(1)…岡本智子（奈良大学大学院）、II-(2)…山川、下高大輔（奈良大学）
製図・拓本・トレース：岡本、下高
レイアウト：岡本
編集：山川
- 5 報告書作成に際しては、以下の方々に貴重なご教示・ご指導をいただいた（五十音順、敬称略）。
稻口勝、金松誠、坂本雅央、西村幸信、幡鎌一弘、松岡利郎
- 6 調査に関わる写真・スライド・実測図および採集瓦は全て大和郡山市教育委員会で保管している。広く活用されたい。

本文目次

I 調査の契機	47
II 調査の所見	47
(1) 石造物	47
(2) 屋瓦	54
III まとめ	59

図目次

図1 覆堂露盤銘	47
図2 覆堂内の石造物配置略図	47
図3 順慶五輪塔実測図 (S : 1/10)	48
図4 五輪塔地輪東面写真および拓影	48
図5 円証寺五輪塔実測図 (S : 1/20)	49
図6 灯籠1実測図および拓影 (S : 1/10)	50
図7 灯籠1竿拓影	51
図8 五輪塔、灯籠1・2(東より)	49
図9 灯籠2竿拓影	52
図10 軒丸瓦実測図および拓影 (S : 1/4)	53
図11 郡山城追手櫓出土軒瓦実測図および拓影 (S : 1/4)	54
図12 軒瓦実測図および拓影 (S : 1/4)	54
図13 丸瓦実測図および拓影 (S : 1/6)	55
図14 刻銘・印銘拓影 (S : 1/2)	56
図15 平瓦および雁振瓦実測図 (S : 1/6)	57

表目次

表1 軒丸瓦観察表	60
表2 軒平瓦観察表	60
表3 丸瓦観察表	60
表4 平瓦観察表	60
表5 雁振瓦観察表	60

図版目次

図版17 1 五輪塔覆堂遠景(東より)	
2 五輪塔覆堂全景(東より)	
図版18~22 遺物	

I 調査の契機

通称「順慶五輪塔覆堂」については、昭和19年に文部省告示第1056号で国宝（当時）指定されたもので、正式な指定名称は「五輪塔覆堂」である。現在、内部の五輪塔および天正期の灯籠（いずれも後述）と共に重要文化財に指定されている。建造物としての構造は1間×1間の特異な本瓦葺宝形造の建造物であり（図版17）、県下に類例をみない。本覆堂の露盤（瓦製）には天正12年（1584）11月の銘文があり（図1）、筒井順慶の没後（天正12年8月没）間もなく築造が開始されたものと思われる。落慶については、順慶の一周年忌法要が営まれた天正13年8月と考えるのが妥当であろう。

平成15年6月3日、この覆堂内部および周辺の清掃作業を行った際、堂の周囲に積上げられていた瓦の中に天正期にさかのばる資料が含まれていることに気付いたため、これを全て採集し、教育委員会において実測や探拓などの整理作業を行った。また、内部の石造物についてもこの機会に併せて調査を行うこととし、7月17日に現地において実測と探拓および写真撮影を主体とする調査を行った。

II 調査の所見

(1) 石造物

順慶覆堂内には筒井順慶の墓塔である五輪塔1基と3基の灯籠が現存する（図2）。五輪塔の左右に天保2年銘の灯籠2基があり（右：灯籠2、左：灯籠3）、右奥には天正13年銘の灯籠1基がある。



図1 覆堂露盤銘（拓影はS:1/4）

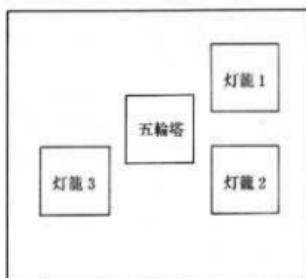


図2 覆堂内石造物配置略図

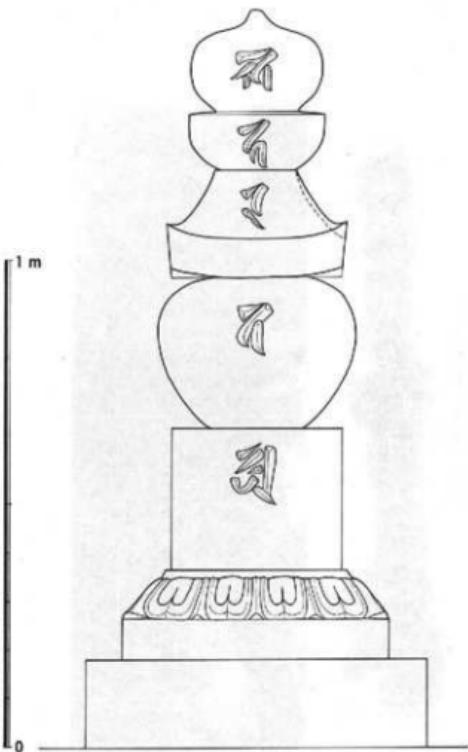


図3 順慶五輪塔実測図 (S:1/10)



順慶五輪塔地輪東面写真および拓影
三十六歳
子時入滅

図4 順慶五輪塔地輪東面写真および拓影

①筒井順慶五輪塔（図3、4）

地覆石上に切石の段を1段置き、その上に反花座、五輪塔を乗せる。花崗岩製で、総高は約152cm、うち五輪塔本体は115cmを測る。台石は1石で、高さ18.5cm、幅70cm。反花座も1石で作り、各面4枚の蓮弁を刻む。蓮弁下は高さ8.5cm、幅54.5cm、蓮弁の上端は幅41cmで、蓮弁上には1.5cmの段を設ける。蓮弁は細長く偏平である。

五輪塔は地、火、水輪が各1石、空・風輪は1石から造り出している。各面に五輪塔四門（「東」発心門：火をすすめ〔南〕修行門：火をすすめ〔西〕菩提門：火をすすめ〔北〕涅槃門：火をすすめ）の梵字を要研彫りし、地輪東面（現正面）には梵字左右に順慶入滅の日を刻む（図4）。現正面にあたる部分の梵字が東を指す発心門であり、またその面に順慶銘が刻まれていることから、五輪塔は造立当初の方向性を保っているものと想定される。なお、この地輪に没年を刻む手法は、奈良市円融寺に所在する順慶の父順昭の墓塔と共通している（図5）（奈良県文化財保存事務所編1985）。地輪は幅35cm、高さ29cmの長方形。水輪は壺形を呈し、最大径は高さ19.5cmの位置にあり、40.5cmを測り、火輪の幅を上回っている。火輪の軒は上部に向かってやや開き、軒先

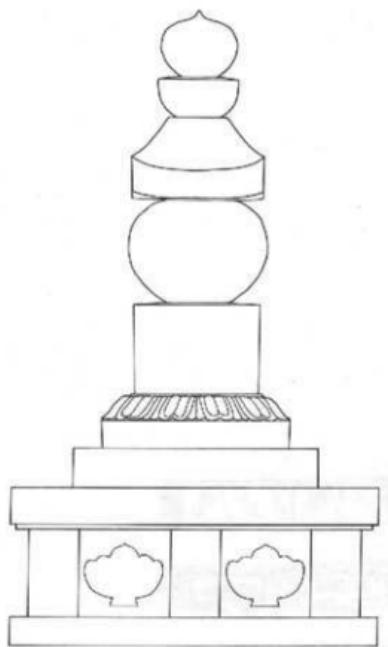


図5 円証寺五輪塔実測図 (S : 1/20, 「重要文化財円証寺本堂・五輪塔修理工事報告書」より再トレース)



図8 五輪塔、燈籠1・2(東より)

で強く反り上がる。風輪は偏平な半球形で、下端幅15cm、上端幅29cm、高さは11cmを測る。空輪は側面がやや直線的で、上部で急にしづんだ形である。

②燈籠1(図6)

この燈籠は銘文によって天正13年(1585)8月、順慶一周忌の際に造立・寄進されたものであることが判明する。角型で火袋は木製、高田十部分類の「御間型燈籠」にあたる(高田1928)。基礎側面は2区に分かって×印を刻み、上端には各面3枚の蓮弁を配し、その上に高さ2.5cmの段を設ける。蓮弁は偏平で細長く、立体感がない。竿は高さ92cm、幅22.5cm。東面には「獻燈」の文字下に灯籠の造立願文が続き、南面には「松田縦巖助」以下14名、北面には16名の寄進者の名が刻まれている(図7)。中台下端は単弁反花を各面3枚刻出し、側面は2区に分かれ、東面、北面は下り藤文、西面と南面は格狭間を刻む。上端は2段の段形になり、火袋を置く。この火袋は木製で、後補である。屋根下には垂木型を表現し、軒の側面には沈線を刻む(桧皮葺を表現)。軒の形状は直線的で軒先でやや外反し、屋根の勾配はゆるやかである。伏鉢は直線的で低く、請花も下端が角張っている。請花の蓮弁は有子葉單弁である。宝珠もまるみを帯びず、直線的になる。

③燈籠2・3(図9)

順慶五輪塔を挟んで並び立つ角型燈籠で、両塔ともに天保2年(1831)に造立されたものである(両塔同銘)。形態もほぼ同じで、両塔ともに請花および宝珠は欠損しており、現在は他塔の残

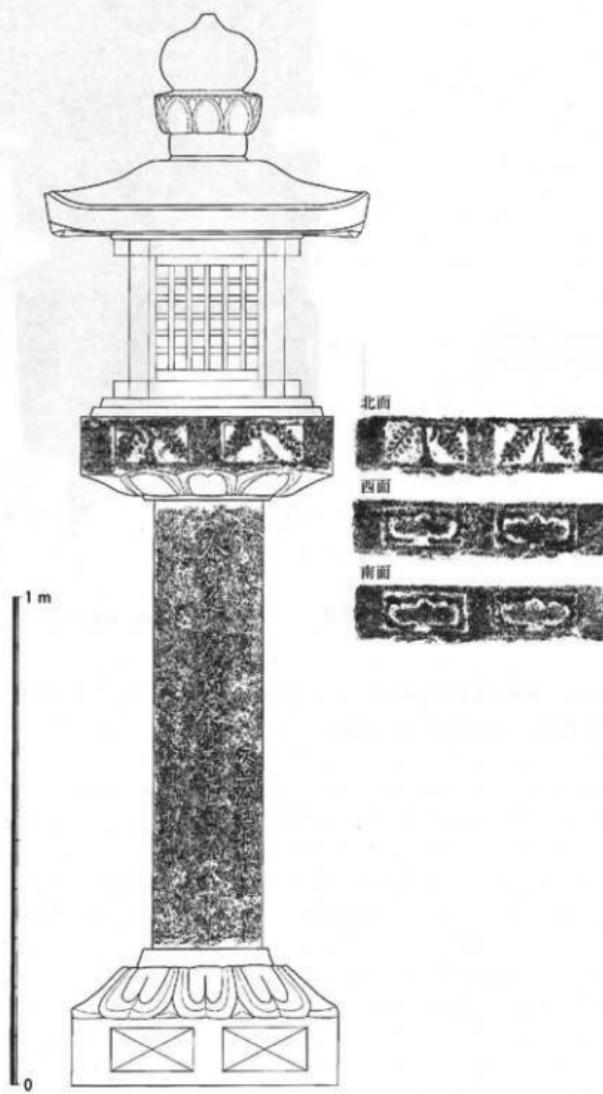


図6 灯籠1 実測図および拓影 (S : 1/10)

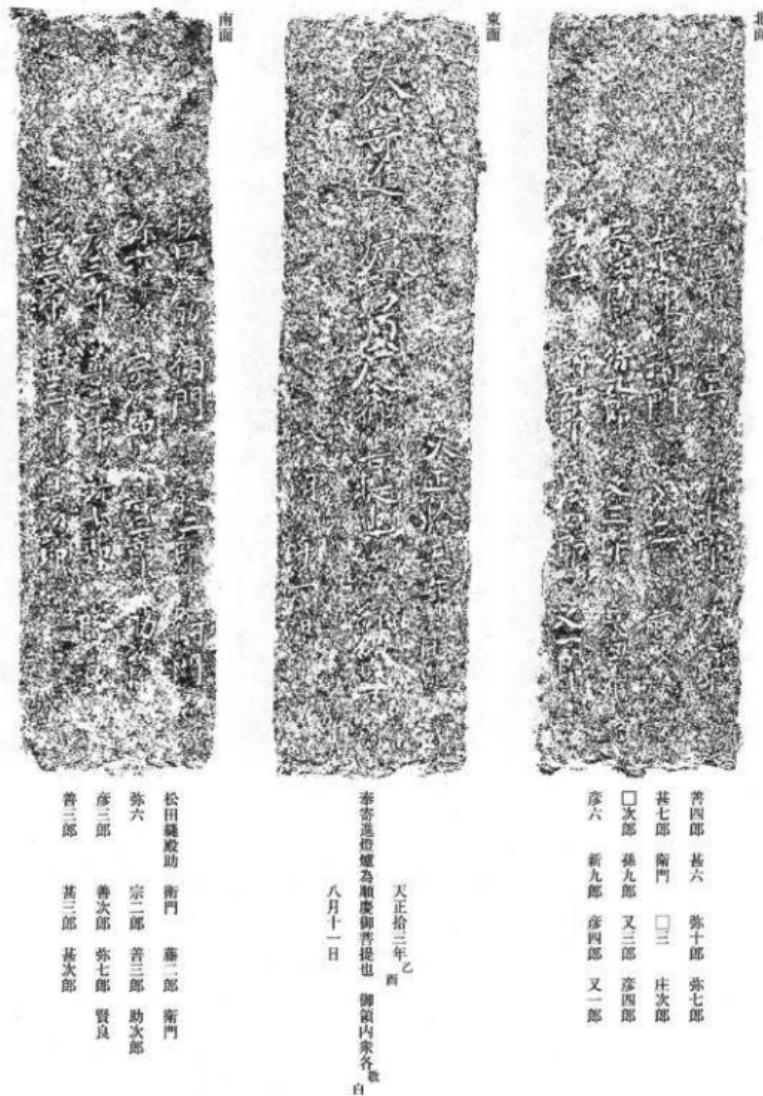
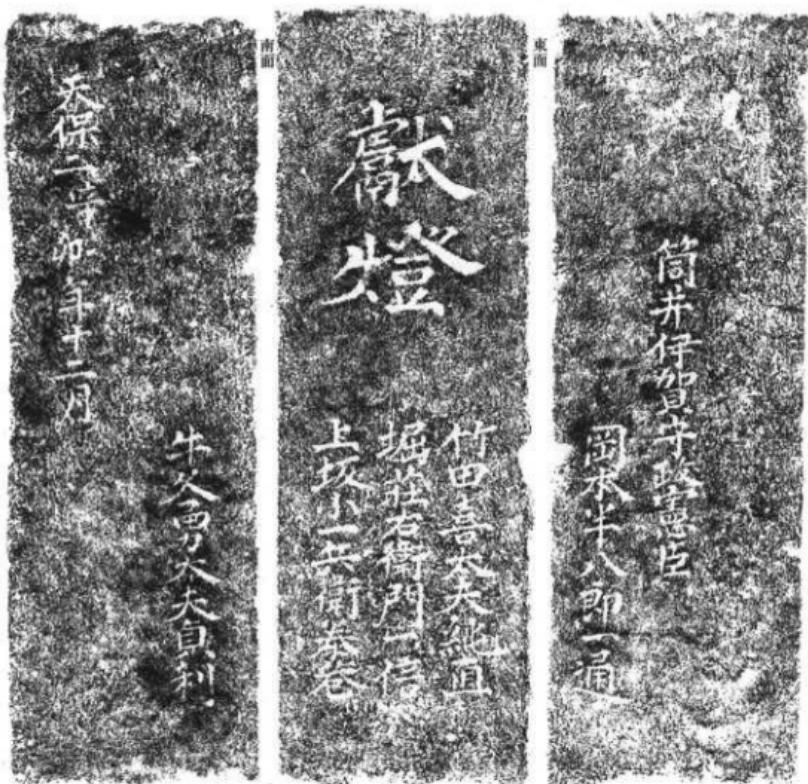


图7 灯籠1 羊拓影



献燈

筒井伊賀守政憲臣
岡本半八郎一通

图9 灯籠2 筆拓影

欠が乗る。基礎は幅45cm、高さ20cmを測り、上端に2枚の蓮弁を刻出する。竿は幅21cm、高さ60cmを測る。中台下端は基礎と同様2枚の蓮弁を刻み込んでいる。火袋も石製で、高さ18cm、幅14cmの火口があり、南面は円形、北面は三日月形の火孔が開いている。笠の軒は、下端部分は直線的であるが上端はゆるやかに反りがある。

銘は竿の3面にそれぞれ刻まれており、「獻燈」の文字の下に「筒井伊賀守政憲」以下5名の造立者銘と「天保二年」銘が北面→東面→南面の順に刻まれる。筒井伊賀守政憲(1778-1859)は、ロシア使節ブチャーチンが来日した際に大目付格のロシア使節応接係として川路聖謹らとともに交渉にあたり、日露和親条約の締結に力を尽くした人物として知られている。

この筒井政憲はまた、文化9年(1812)、父正蔵らとともに順慶の木造と厨子を大坂で調製し、寿福院に安置している(永島1983)。政憲の家系は筒井家の庶流であるもの^{〔注1〕}、当時の幕府で重鎮をなし、順慶の250年忌にあたるこの天保2年、本灯籠を順慶の墓所

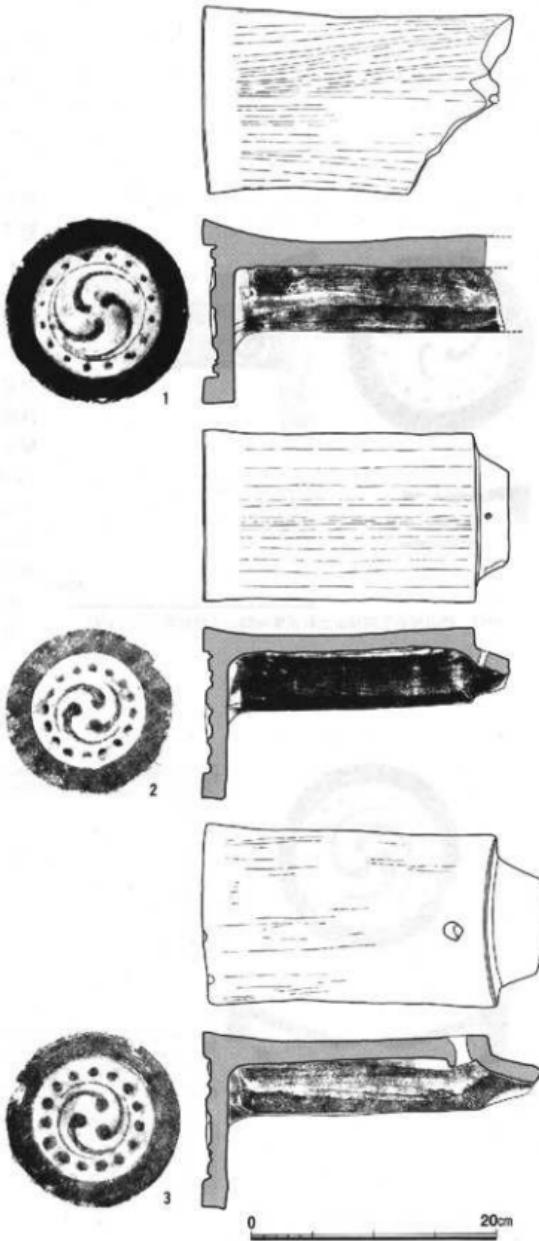


図10 肝丸瓦実測図および拓影 (S:1/4)

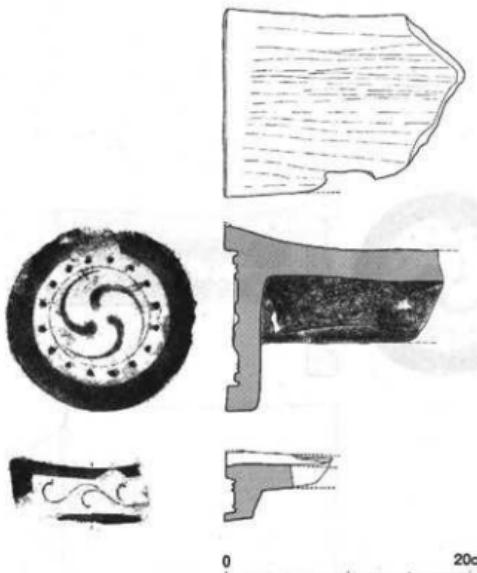


図11 郡山城追手向櫓出土軒瓦実測図および拓影 (S : 1/4)

に寄進し、供養をなしたものと推定される。

(2) 屋瓦

ここに紹介する五輪塔覆堂の屋瓦は、昭和25年の解体修理の際に取り外されたものと推定され、覆堂周辺に長期間にわたり積上げられていたものである。今回、覆堂の清掃作業に伴ってこれらを全て回収し、洗浄および記名等の基礎整理作業の後、探査と実測を行った。これらの屋瓦は葺き替えに各時期のもの（天正・享保・昭和ほか）が混在する。また、種類としては、軒丸・軒平・丸・平・雁振瓦の5種がみられた。

①軒丸瓦 (図10、12)

軒丸瓦は、大きく4種に分類

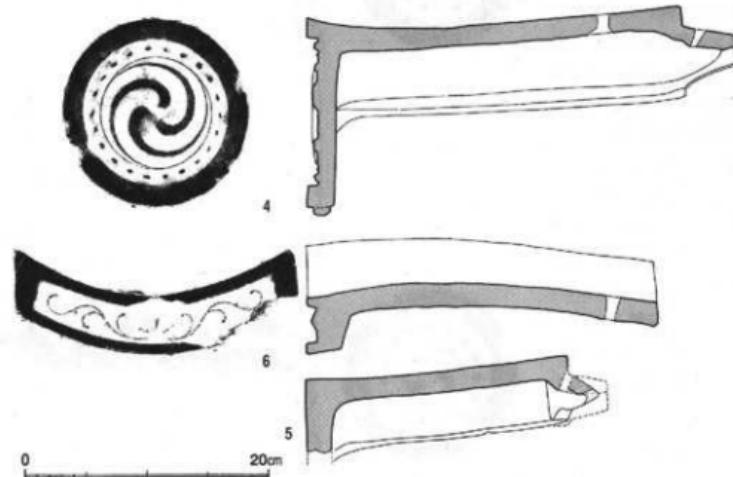


図12 軒瓦実測図および拓影 (S : 1/4)



図13 丸瓦実測図および拓影 (S : 1/6)

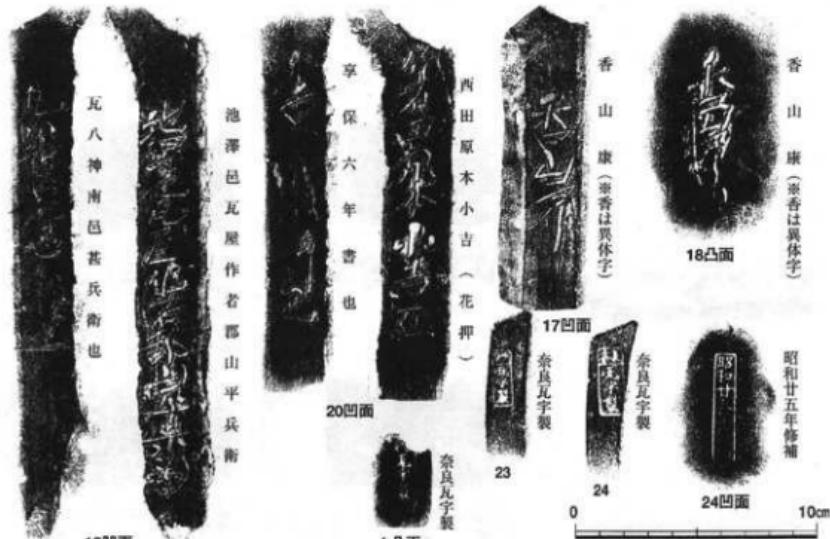


図14 刻銘・印銘の拓影 (S : 1/2)

することができる。

1は、粘土塊から粘土板を切り取った際の痕跡が凹面に放射状に残るもので、いわゆるコビキA技法の瓦である（森田1984）。順慶幕覆堂の創建時の葺瓦と推定される。瓦当文様は右巻きの三巴で、その周りに圓線を持ち、16個の珠文が取り巻く。瓦当面直径は152mmである。今回回収した屋瓦のうち、この種はこれ1点のみである。なお、この軒丸瓦には珠文間に范傷が認められるが（図10、図版18-1）、同様の范傷を持つものが、郡山城追手向櫓出土軒丸瓦と筒井順慶の菩提寺である奈良市伝香寺の所用瓦で認められることから（図11、図版22）、これらの同范関係は明らかである。

2は、凹面にコビキBによる成形痕がみられる。瓦当文様は、左巻きの三巴で、圓線を持たず、16個の珠文が取り巻いている。調整その他の特徴が似る丸瓦に「享保六年」（1721年）銘が刻まれているものがあり（後述）、この軒丸瓦の製作時期もそれと同時期の可能性が強いものと考えられる。

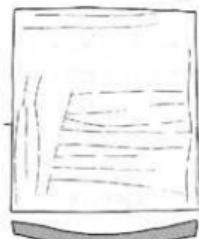
3は、2と類似した文様構成であるが、珠文の数が15個であり、また全体に文様のくずれが大きい。2に比較して時期的に下るものであろう。おそらく後述のコビキB技法丸瓦のうち、小型のものと同時期（幕末前後）であろう。

4は、凸面に「奈良瓦字製」⁽¹⁾の印銘があり、後述する平瓦に同じ印銘と「昭和廿五年修補」の銘があることから、昭和25年（1950）の修理工事に伴う修復瓦と推定される。瓦当文様は、左巻き三巴で圓線を持ち、それらの周りに22個の珠文が取り巻いている。凹面には丁寧なナデ調整が行われる。この文様は、その構成からも明らかのように、創建時の瓦（1）を模したものではない。

5は、瓦当面が無文となるものである。凹面には丁寧なナデが施されている。



21



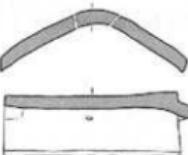
22



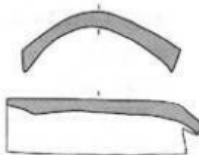
23



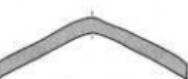
24



25



27



26

0 20cm

図15 平瓦および雁振瓦実測図および拓影 (S:1/6)

②軒平瓦（図12）

6と同じ瓦当文様を持つものは12点確認できたが、すべて同范と考えられる。中心飾は三葉で、左右には均整唐草文を配する。凹・凸面共にナデもしくは板ナデが施されている。郡山城追手向櫓出土の軒平瓦（図11）や伝香寺本堂の瓦と同范関係を有し、覆堂創建時の瓦と推定される。

③丸瓦（図13）

丸瓦は、凹面がコビキA技法のものとコビキB技法のものに二分される。このうち前者には吊り紐痕の有無や糸引痕の方向に差異がみられる。また、後者には鉄線引きのあとにタタキ痕を有するものと有さないものがある。さらに、全長について3種の異なるものが認められる。

7は、凹面にコビキA技法がみられるもので、吊り紐痕を有する。凸面にはミガキ調整を施す。同種のものは4点確認できた。

8~10は凹面にコビキA技法がみられるもので、内面に吊り紐痕跡を有さないものである。

11は、凹面にはやはりコビキA技法がみられ、かつタタキ調整の痕跡を有するものである。この種のものは、13点確認され、コビキA技法の丸瓦の中で最も多く確認できた。

以上の凹面コビキA技法の瓦は総数にして26点確認できたが、これらは覆堂創建時に製作されたものと考えてよからう。

12~17は、凹面コビキB技法のものである。このうち、12・16は全長が21・23cmの小型のもので、凹面にはタタキ痕が顕著に残る。調整上の諸特徴から、これらの製作時期は幕末前後に下るものと思われる。また、17は全長が27cmを超えるもので、側端面をはじめとする端部の面取り調整も小型のものより丁寧になされており、凹面のタタキ調整はさほど顕著ではない。時期的に小型のものに先行すると考えてよからう。なお、この大型のものにはヘラ書きの銘を有するものがある（拓影=図14）。瓦工人の名が判明するものとして19や20があり、このうち19には池沢村（現大和郡山市）の瓦屋「郡山平兵衛」、^{〔13〕}神南村（現斑鳩町）の「甚兵衛」名が併記されている。このほか20には西田原本（現田原本町）の「小吉」名が刻まれている。また、20には「享保六年書也」との刻銘があり、これらの特徴を有する瓦が享保6年（1721）前後に製作された可能性を示している。^{〔14〕}

④平瓦（図15）

平瓦は、焼成・銘により大きく2型式に分類できる。

21は、全長約29cmを測り、弧深は約45mmと深い反りを持つ。凹面調整はナデ、凸面調整は板ナデである。同種のものは20点確認した。

22は、全長約29cmを測る小型のものである。調整は凹・凸両面ともに板ナデであるが、今回は、1点のみ確認された。

23は、「奈良瓦字製」（先述）の印銘を有するもので、昭和25年の修理の際に使われた瓦である。凹面調整はナデ、凸面調整は板ナデである。また、24は「奈良瓦字製」、「昭和廿五年修補」の印銘を有する。

⑤雁振瓦（図15）

雁振瓦は、比較的大型のもの（25・26）とそれよりやや小型のもの（27）がある。このうち、26には内面に墨書きがみられる。なお、これら雁振瓦の製作時期は不明であるが、焼成の特徴からみて昭和修理の際に用いられたものではない。

III まとめ

石造物については、その銘文は従前一部公表されていたもの（郡山町1953など）、拓影と詳細な写真の公表は今回が初出であり、これにより証文の客観的な追認が可能になった。また、順慶五輪塔実測図の公表により、同時代の戦国武将や僧侶の五輪塔、あるいは筒井家總領筋の五輪塔などとの具体的比較が可能になった。さらに、灯籠1実測図の公表は、春日大社に存在する多数の戦国後期～江戸初期の石灯籠との具体的な比較作業などを上上で、きわめて重要な意義がある。

また屋瓦に関しては、とりわけ天正期のものについては露盤銘からその製作年次や製作者が判明する希有な例であり、その詳細な拓本や実測図の公開により、天正12・13年段階における西京瓦工人の具体的作例（瓦当文様や調整技法）を知ることができるようになった。さらに、範例から郡山城などとの同範関係が明らかとなっているので、本報告事例は、初期の城郭瓦を研究する上できわめて有意義なデータといえよう。

このほか、屋瓦補修の時期としては、享保6年（1721）と幕末前後、そして昭和25年の3回が確認し得る。このうち年号がはっきりしない幕末前後のものについて、ここでは筒井政憲によつて灯籠2・3が寄進・造立された天保2年（1831）前後のことと推定しておきたい。

以上のように今回の調査は発掘を伴うものではなかったが、比較的軽微な作業によって、戦国末期の大和を物質資料から考究する上できわめて重要なデータを得ることができたものといえよう。具体的な研究の方は今後の作業に委ねられることになるが、本データを用いた具体的な検討成果の一端については、近刊の『筒井城総合調査報告書』^{注1)}で試みる予定である。本書と併せて参照いただければ幸甚である。

【注】

注1) 『寛政重修諸家譜』「第十九十七」。

注2) 「瓦字」は製瓦業者で、奈良市に現存する。

注3) 享保9年（1724）の「和州御領郷鏡」には池沢村に職人1名として「瓦部」があげられている（角川書店1990）。あるいはこの郡山平兵衛のこと指すか。

注4) これらの刻銘の解説に際しては、西村幸信氏（@池沢文庫）の多大な御教示を得た。

注5) 大和郡市教育委員会より2004年3月に預行予定。

【参考文献】

角川書店 1990「池沢」「角川日本地名大辞典29 奈良県」

郡山町 1963「郡山町史」

高田十郎 1928「春日ノ石燈籠」「なら」48（喜多野徳俊「春日の神の石燈籠」、1995に再録）

永島福太郎 1983「南都傳香寺」

奈良県文化財保存事務所編 1985「重要文化財円証寺本堂・五輪塔修理工事報告書」奈良県教育委員会

森田克行 1984「屋瓦」「浜津高槻城本丸跡発掘調査報告書」高槻市教育委員会

報告番号	計測値 (mm)					瓦当文様	珠文數	凹面調整	備考
	直径	内区径	内区径+外区内縁幅	外縁幅	深さ				
1	152	79	107	22	11	右三巴	16	コビキ A	内縁線あり
2	136	60	92	20	7	左三巴	16	コビキ B	長さ22.0cm(玉縁含まず)
3	143	63	97	23	6	左三巴	15	コビキ B	長さ23.0cm強(玉縁含まず)
4	155	92	120	18	10	左三巴	22	不明	「奈良瓦字製」印あり
5	154復	-	-	-	-	無	-	不明	

表1 軒丸瓦観察表

報告番号	瓦当面 (mm)									凹面 (mm)	凸面
	上弦幅	弧深	下弦幅	厚さ	内区厚さ	内区上幅	内区下幅	左上縁幅	右上縁幅		
6	230	41	不明	47	26	10	9	21	21	三葉 ×	250 ナダ 板ナダ

表2 軒平瓦観察表

報告番号	計測値 (mm)					凸面調整	凹面コビキ	備考		
	全長	玉縁長	広縁幅	玉縁幅	厚さ					
7	310	45	148	82	18	ミガキ		吊り絆痕あり		
8	301	46	144	83	19	ミガキ				
9	307	43	137	77	19	ミガキ	A	吊り絆痕なし		
10	307	47	150	77	25	ミガキ				
11	301	46	140	85	18	ミガキ		糸引後にタキ痕		
12	217	34	128	69	16	ミガキ	B			
13	227	27	136	74	16	ミガキ		明瞭なタキ痕		
14	249	41	136	90	15	ミガキ				
15	209	32	123	65	15	ミガキ				
16	233	26	140	75	15	ミガキ				
17	278	35	140	76	21	ミガキ		不明瞭なタキ痕、凸面側に「香山唐」銘あり		

表3 丸瓦観察表

報告番号	計測値 (mm)					調整	凸面	備考		
	全長	広縁幅	狭縁幅	厚さ	弧深					
21	287	225	212	28	44	ナダ	板ナダ			
22	250	233	223	20	19	板ナダ	板ナダ			
23	281	249	222	19	41	ナダ	板ナダ	「奈良瓦字製」印あり		
24	286	230	219	21	27	板ナダ	板ナダ/ナダ	「昭和廿五年修補」印あり		

表4 平瓦観察表

報告番号	計測値 (mm)					調整	凸面	備考		
	長さ	幅	厚さ	弧深	玉縁長さ					
25	213	230	20	63	25	ナダ	ミガキ			
26	212	237	19	60	不明	ナダ	ミガキ	凸面に墨書あり、玉縁破損		
27	213	230	20	63	25	ナダ	ミガキ			

表5 雁振瓦観察表

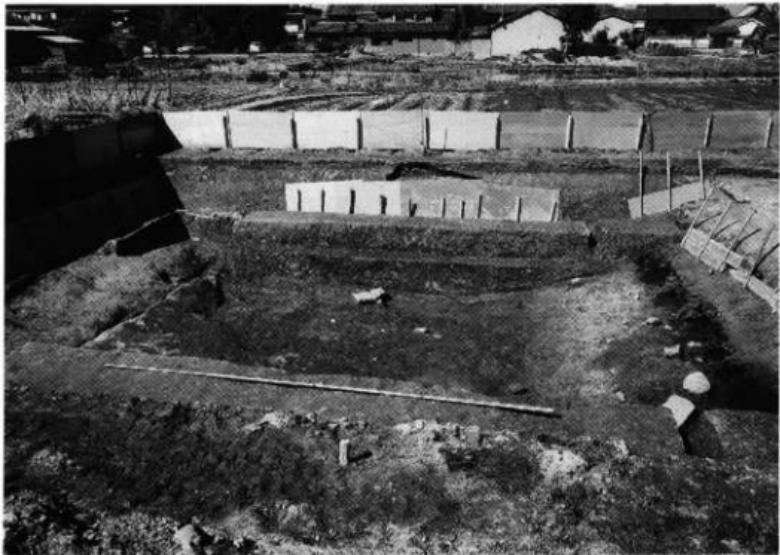
図 版



1 調査前風景（北より）



2 第1トレンチ調査前風景（北より）



1 第1トレンチSD-01 完掘状況（南より）



2 第1トレンチSD-01 完掘状況（西より）



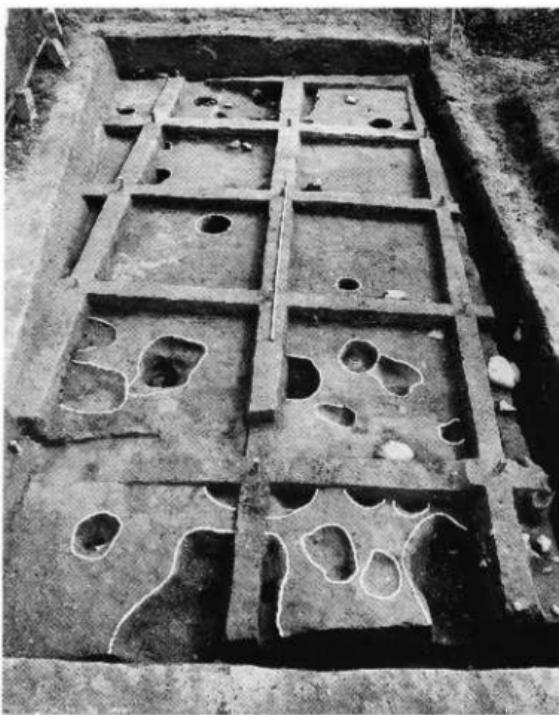
1 第1トレンチSD-01 東側斜面（北より）



2 第1トレンチSD-01 遺物出土状況（北より）



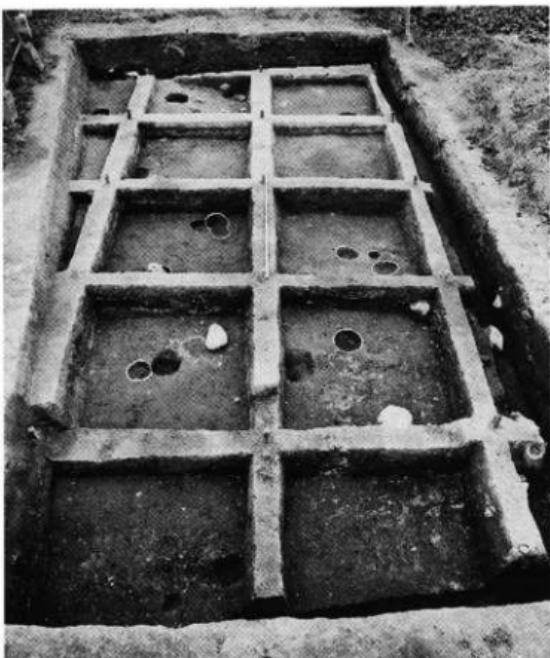
1 第2トレンチ SP-102 遺物出土状況（東より）



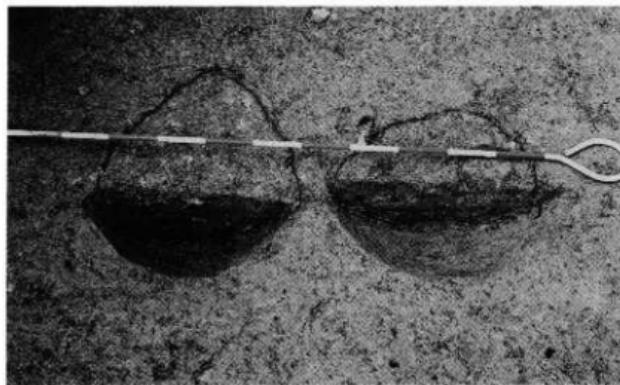
2 第2トレンチ第1造構造完成状況（南より）



1 第2トレンチ SX-201 遺物出土状況（東より）



2 第2トレンチ第2造構面完掘状況（北より）



1 第2トレンチ第3造構面ピット検出状況（北より）



2 第2トレンチ第3造構面完掘状況（北より）



1 第2トレンチ SD-401遺物出土状況（西より）



2 第2トレンチ第4遺構出土状況（北より）



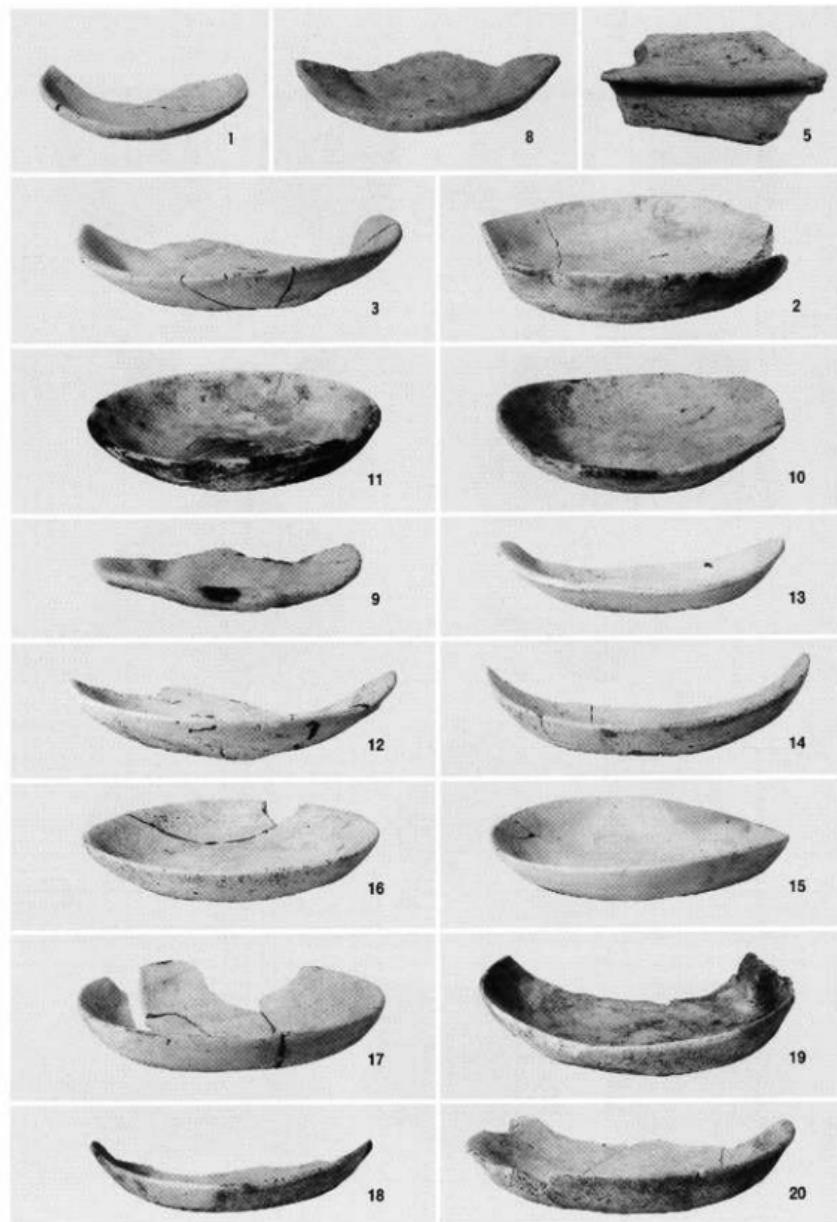
1 第3トレンチ完掘状況（西より）

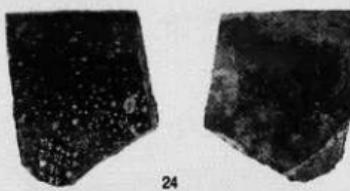
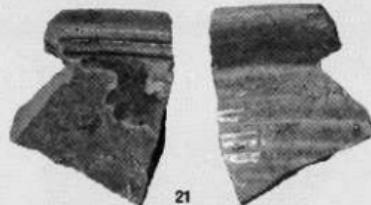


2 現地説明会風景



3 現地説明会風景





29

26



28



27



32



31



34



33



35



36



38



37



41



42



43



45



46



50



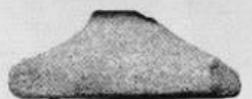
48



47

図版 12
筒井城 5 次





59



60



61



62



63



64



67



65



68



69



70

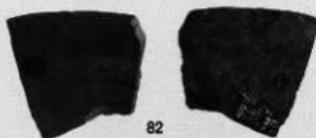


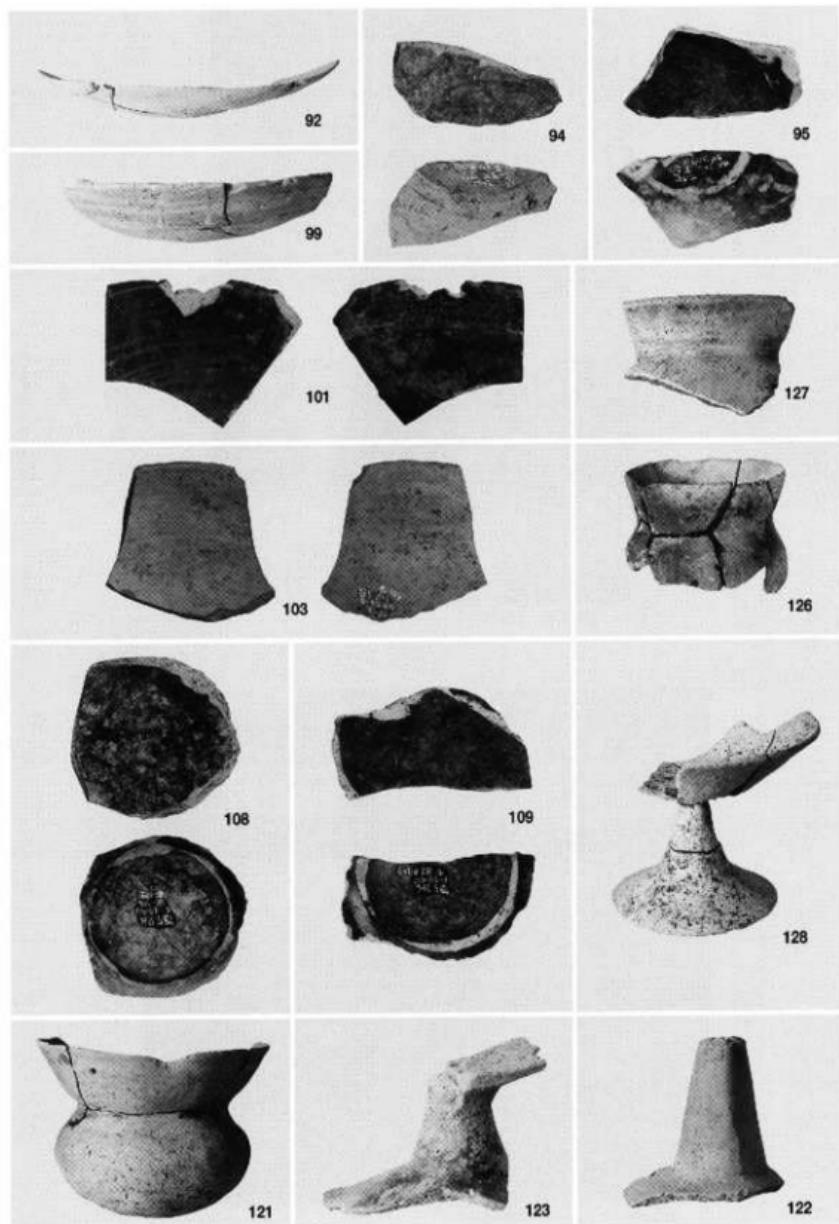
71



72

圖版 14
筒井城 5 次







1 完掘状況（北より）



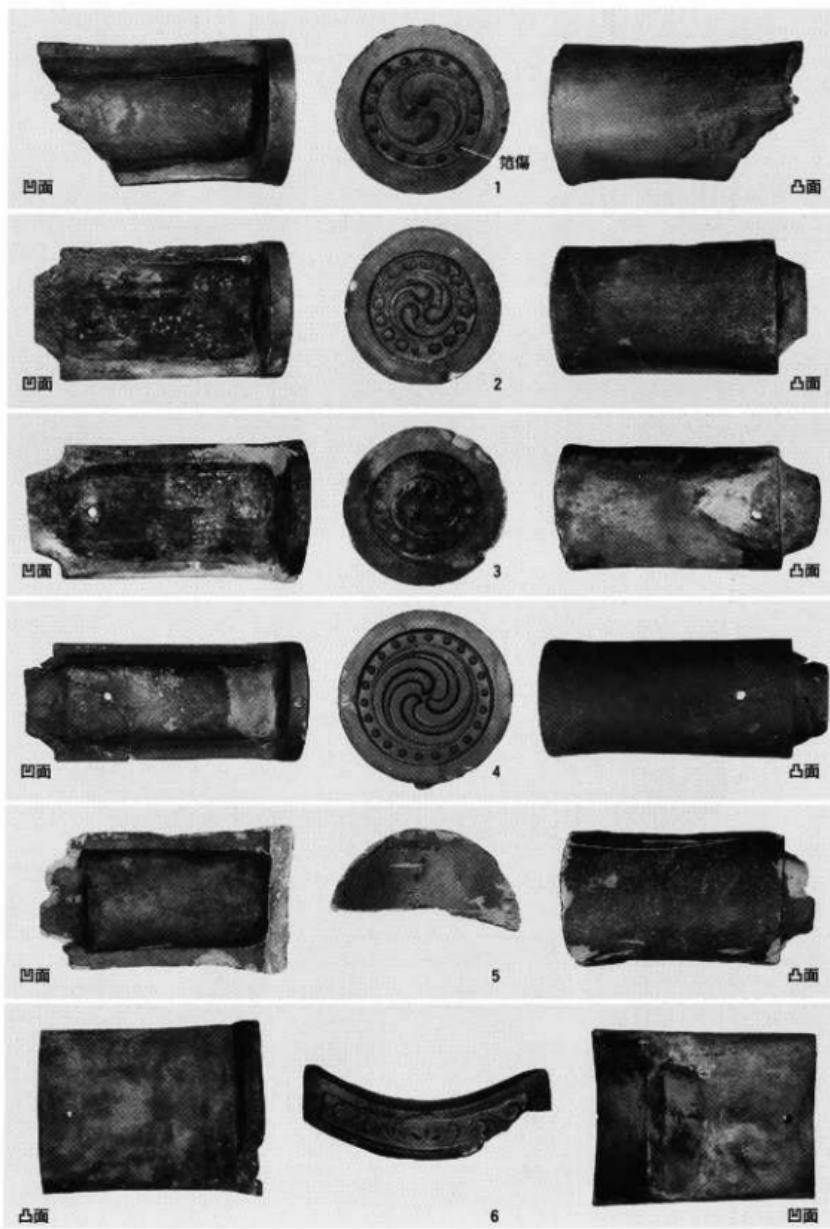
2 調査地航空写真（昭和38年撮影）

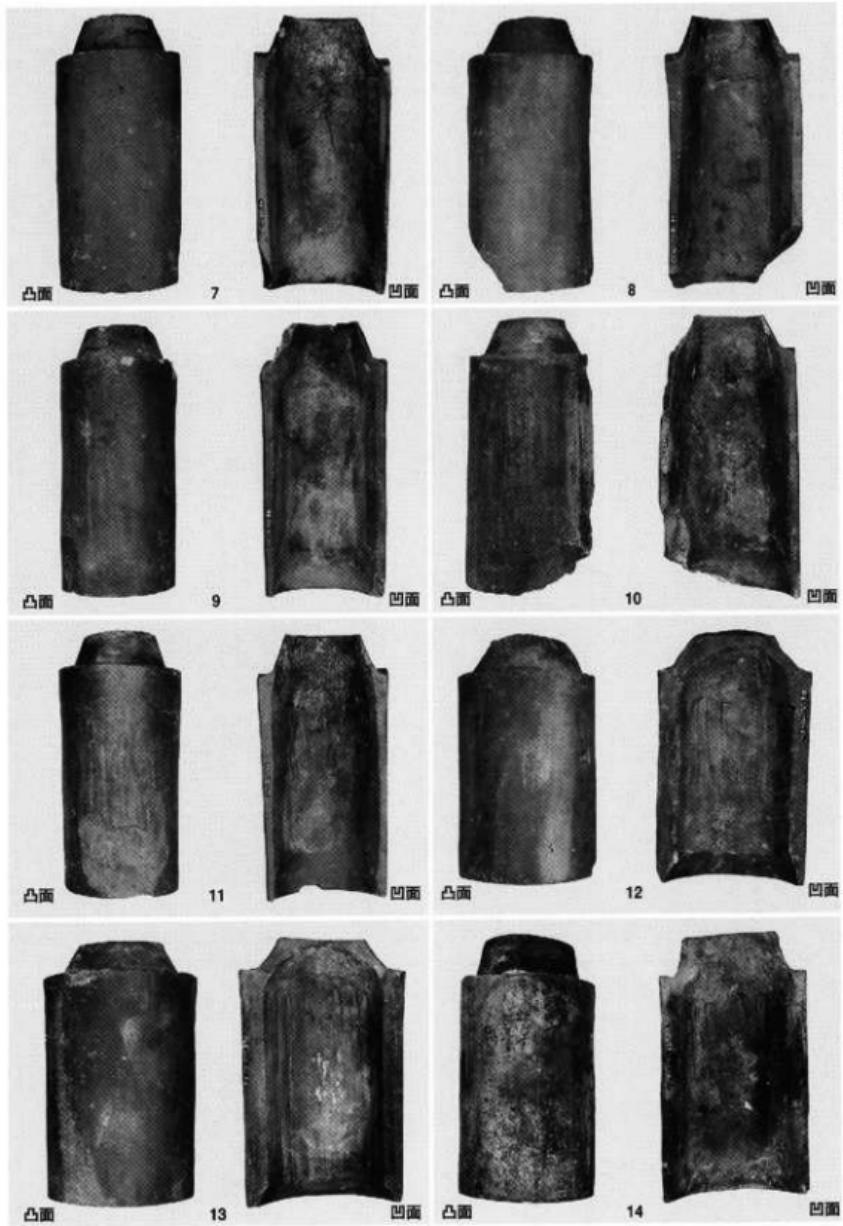


1 五輪塔覆堂遠景（東より）



2 五輪塔覆堂全景（東より）





圖版 20
順慶五輪塔殘堂



凸面

15



凹面 凸面



16



凹面



凸面

17



凹面 凸面



18



凹面



凸面

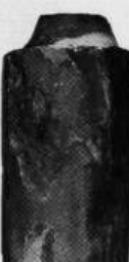
19



凹面



21



凸面

20



凹面



凸面

凹面



22

凹面



23

凹面



24

凸面



凸面



凸面

凸面

凸面



凸面

凸面

凸面

25

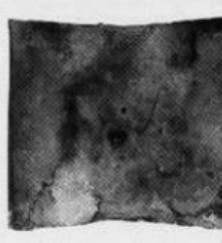
26

27

凹面



凹面



凹面



凹面



凹面



凸面



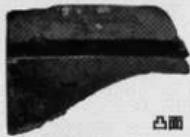
都山城



都山城



范傷
伝番寺



凸面



凹面

大和郡山市埋蔵文化財調査報告書第9集

筒井城第5次発掘調査報告書

付1 筒井城第6次発掘調査報告
付2 筒井順慶五輪塔覆堂石造物・屋瓦調査報告

平成16年3月31日

編集・発行 大和郡山市教育委員会
大和郡山市南郡山町554-1

印 刷 明新印刷株式会社
奈良市南京終町3丁目464番地

表紙イラスト・題字: 小川二泰氏